

スウェーデンにおける1877年改革前後のスロイド学校の実態

— オットー・サロモンの著作からみえてくるもの —

横 山 悦 生

1. はじめに
2. 1870年代までの民衆学校の発展
 - (1) 1842年民衆教育令と義務教育
 - (2) 民衆（国民）学校への就学実態とその背景
 - (3) 補習学校（fortsättningsskolan）
3. 1870年代前半における農村部のスロイド学校
 - (1) オットー・サロモンの『スロイド学校と国民学校 第1巻』にみられるスロイド学校の実態とその改革課題
 - (2) 1876年12月におけるスロイド学校一覧とその所在地
 - (3) 1870年代前半のスロイド学校の実態
4. 1877年改革によるスロイド学校の変容の萌芽
 - (1) 1877年改革の概要
 - (2) スロイド学校と国民学校との統合など—オットー・サロモンの『スロイド学校と国民学校 第2巻』にみられるスロイド学校改革の若干の論点—
 - (3) 1877年改革によるスロイド学校変容の萌芽の実態
5. 若干の分析
6. 結びにかえて

1. はじめに

本稿の目的は、スウェーデンのスロイド教育史における一つのメルクマールである1877年スロイド教育改革（以下1877年改革とする）の背景となっている、①それまでの民衆学校の発展状況、②1870年代に創設されたスロイド学校の実態について述べ、若干の分析を加えることである。

1860年代後半にスウェーデン各地でヘムスロイド（hemslöjd）が後退した後、農業経済会議所（Hushållnings-sällskap）* や地方議会（Landsting）**がスロイド教育を促進するために補助金制度を発足させた。ヘムスロイドとは基本的には農村部において家庭生活に必要なものを簡単な道具で

つくることで、地域によってはその特産物として家庭生活に必要なもの以外にも販売に出すものを生産することもあった（ヒューススロイド（husslöjd）やヒュースフリート（husflit）という用語も使われたが、これらはヘムスロイドと同義語である）。工業化による安価な製品の普及、農村での労働形態の変化によって、1860年代後半に減少したとされ、1870年代に入ってヘムスロイド復興運動が展開した。

1942年に国民学校制度100周年を記念して出版され

** Landsting に正確に対応する日本語はないが、あえて翻訳すると「地方議会」であろう。それは一定の地域範囲（“landstingsområde”）での政策を決定し、遂行することができる機関であった。この“landstingsområde”は1862年の改革によって創設され、地図のうえでは“Län”（県）の範囲とほぼ同じであった。Landsting（ランスティング）は農業の促進、交通、警察、教育、病院などに責任をもつ機関でもあった。

* 農業経済会議所は、農業やそれと関連する産業を促進するために組織された団体である。（*Svenska Uppslagsbok*, s. 982-s.983, Malmö, 1946-1955）

たヴィクトル・フレドリクソン編『スウェーデンの国民学校の歴史 (Viktor Fredriksson ed., *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*)』には「我が国のスロイド教育はヘムスロイドが死滅する危機の時期において、それを保持しようとする関心から起こってきた。農業に従事する住民が自給自足的な立場に立つ限り、衣服や木や金属による簡単な対象物は、その大部分が家庭での製造を通じて、彼らの必要を充たしていた。糸をつむぐこと、布を織ることはほとんどの地域で『家庭で必要なスロイド (husbehovsslöjd)』として存在した。さらに、ある地域では重要な副業を形成した。19世紀半ばに工業が大量生産を可能にし、農業の集約化が農地の世話により多くの労働を要求したとき、ヘムスロイドは減少した。……ヘムスロイドに最初に興味を示したのは農業経済会議所であった。というのは、ヘムスロイドは農業の副業とみなされたからである。」と書かれている¹⁾。ヘムスロイドは、ここにでてくる「家庭で必要なスロイド」という概念より広義の概念で、「家庭で必要なスロイド」と副業としてのスロイドとを合わせたものがヘムスロイドであると考えてよい。

また、1872年には政府はヘムスロイドを復活・促進させるための援助者を国内の各地に派遣するように予算措置をとった。この措置によって国内の各地を講演し回ったカール・アールボーン*の講演の内容の一部は以下のようなものであった。

「人は本業に配慮することだけでは不十分で、労働者が本業に従事していない時間を利用して、家計に小さくても必要な貢献をなす労働の重要性を思い起こさなければならない。冬の夜の時間を睡眠や怠惰に無駄に過ごすべきではない。ヒュースフリート

(husfliten) は将来勤勞になれるべき子どもたちに祝福をもたらすであろう。」²⁾

このアールボーンの言葉が示しているように、ヘムスロイドの復興運動の担い手たちは、「成人の世代に欠落している技能や能力を成長中の若い世代に伝えていくべきであり、そのことによって現在の(技能の一引用者)欠落が将来の(技能の)欠落になることを防ぐことが可能になる」³⁾ことを、つまりヘムスロイドの復興のためには若い世代に対するスロイド教育がきわめて重要な課題であることを次第に自覚していった。こうして1870年代にスロイド学校がスウェーデン国内の各地に新たに設立されていったが、その実態についてはほとんど知られていない。

筆者はすでに別稿⁴⁾において、オットー・サロモン(Otto, Salomon)がスロイド教育の実践を発展させたネースの少年スロイド学校の事例分析をとおして、1870年代後半にスロイド学校と国民学校とが統合されていく要因を解明した。このネースの少年スロイド学校は、1870年代に創設されたスロイド学校の一つにすぎない。その他の同時期における同種のスロイド学校は、地域によっては不安定な存在であったこともあり、その実態に関する調査はなく、その正確な数もよくわかっていない。

アルバート・ヴィベリ(Albert Wiberg)は、『学校スロイド前史—スウェーデンの労働教育学の発展におけるいくつかの系譜(1877年まで)—第1分冊1861年まで—(Till Skolslöjdens förhistoria—Några utvecklingslinjer i svensk arbetspedagogik intill 1877—*I Tiden intill 1861*)』の中で、国民学校にスロイドを導入する大きな契機になった1877年(国会決議とそれに基づく法令)を学校スロイドの成立のメルクマールとしてとらえ、それ以前の時期のスロイド教育の発展過程をその前史と位置づけ、主として1700年代から1861年に至るスロイド教育をめぐる思想とスロイド教育の実態の展開過程を詳細に描いている**。ただし、実際には彼の論述は1861年までで終わっているので、彼の著書には1870年代のスロイド学校の実態はまったく出てこない。

筆者がこれまで調べた限りでは、1870年代のスロイ

* アールボーンは、装飾彫刻家(ornamentsbildhuggare)で、1845年のスウェーデン・スロイド協会の創設にかかわった人物の一人であった。1870年代初めには、スウェーデンの各地でヘムスロイドに関する講義をもち、ヘムスロイド復興運動に取り組んだ。彼が1875年にダーラナ地方を講演で回った際の報告書が残されている(*Berättelse af Ornamentsbildhuggaren C. Ahlborn rörande hans resa och verksamhet för huslödens upphjelpande i Dalarna år 1875*)。この報告書は、コッパルベリ県の農業経済会議所管理委員会に提出されたものであるが、ここからダーラナの各地域でヘムスロイドの復興運動が熱心に取り組まれ、スロイド学校がつくられていった事実を読み取ることができる。

** 彼はこの本(1939年に出版された第1分冊)で1700年代から1861年に至るスロイド教育をめぐる思想とスロイド教育の実態の展開過程を詳細に描いている。しかし、1861年から1877年までを論述する予定であったと思われる第2分冊は出版されることはなかった。

ド学校の全国的状況をかなり詳細に伝えている資料としては、オットー・サロモンが1876年と1878年に出版した著作 *Slöjdskolan och folkskolan I*, *Slöjdskolan och folkskolan II* に紹介されたスロイド学校に関する記述が唯一のものであるように思われる⁸⁾。本稿では、この資料にもとづいて、スロイド学校の実態をくわしく紹介し、若干の分析を加える。

サロモンが *Slöjdskolan och folkskolan I* (1876) と *Slöjdskolan och folkskolan II* (1878) において紹介しているのは主に男子を対象としたスロイド学校なので、本稿で紹介するのも、男子を対象としたスロイド学校である。ただし、学校によっては女子を対象としたスロイド学校に関する記述もみられる。その場合にはそれについても紹介する。

2. 1870年代までの民衆学校の発展

(1) 1842年民衆教育令と義務教育

1842年の民衆教育令 (Kungl. Stadgan den 18 Juni 1842 angående folkundervisningen i riket) によって、すべての民衆に義務教育を課するという理念が確立された。1842年以前にもいくつかの教区では、民衆学校* (folkskola) が組織されていたが、この法令によって、都市部のすべての教区 (församling) と農村部のすべての教区 (socken) に「学校委員会 (skolstyrelsen) を組織し、」「5年以内に最低1校の学校 (固定型 (fasta)) を、例外的な場合として巡回型 (flyttbara) 学校を、しかるべき資格を持った教師を雇用して設立することが義務づけられた」⁹⁾。また、「学齢にある子どもを出席させることが義務」とされたが、「必要とされる理解能力を欠いている子どもだけではなく、貧困家庭の子ども」には「より限定された教育が与えられる」とされた¹⁰⁾。このような規定は、スウェーデンの人口の大部分を占める農村の貧困家庭にとって児童労働が必要であった事実と関連していた。

* folkskolaのfolkという言葉の翻訳については、歴史学研究において重要な検討課題となっている。現時点で筆者は、主に貧民の子どもを対象とする民衆学校 (folkskola) から、より広範な階層の子どもを対象とする国民学校 (folkskola) に徐々に移行していったと考えており、その意味で国民学校と表記することができるのは、1880年前後の時期であると考えている。国民学校と古典語学校 (gymnasium) との併存という複線型学校制度が完全になくなるのは、1962年の総合制基礎学校制度が発足してからである。

まず、表1にスウェーデンにおける人口の変化と都市部と農村部の住民の割合の変化 (1860-1885) を示す。

表1

	総人口	農村部人口割合	都市部人口割合
1860	3,859,728人	88.74%	11.26%
1865	4,114,141人	87.87%	12.13%
1870	4,168,525人	87.05%	12.95%
1875	4,383,291人	86.00%	14.00%
1880	4,565,668人	84.88%	15.12%
1885	4,682,769人	82.81%	17.19%

Sveriges Officiella Statistik, 1860, 65, 70, 75, 80, 85 から作成

この表1から1870年代においてはスウェーデンの農村部の人口割合は85パーセント以上であったことがわかる。人口の大部分が住む農村部では隔日に登校する学校である隔日学校 (varannandagskola) や教師がいくつかの学校を訪問する巡回学校 (ambulerande skolor) などに通学する生徒も多かった。巡回学校**では、生徒はある一定期間のみ学校に通学した。農村の子どもは、年齢に応じた仕事に従事しており、農村部の親の学校教育に対する「抵抗」(motstånd) は地域によっては1920年代まで続いた¹¹⁾。

このような変則的な形態の学校を含めて、国民(民衆)学校への就学状況を表2に示す¹²⁾。

この表2の左半分は各学校形態ごとの生徒数であり、右半分はその百分率である。「固定型」と表記したのは、固定型国民学校 (Fasta folkskolor) をさし、それは独自の校舎をもち、有資格教員が教えている国民学校であった。「巡回型」と表記したのは巡回型国民学校 (Flyttande folkskolor) をさし、それは有資格教員が学校を巡回する形態の国民学校教育であった。低学年学校 (Mindre skolor) は1856年から発足した学校で、農村部の僻地で国民学校までの距離が長い場合にその代替機関として設置された。無資格教員が教えることができ、多くは少数の生徒を対象とする学校 (固定型と巡回型があった) であった。この低学年学校は当初は法令上では幼児学校 (Småskolor) とも呼ばれたが、1871年から幼児学校は国民学校の準備教育を担う学校となり、独立した区分とされた。幼児学校は2年あるいは3年制の学校で、その後国民学校 (その修業年限は、幼児学校が2年の場合国民学

** 巡回学校 (ambulerande skolor) と巡回型 (flyttbara) とは同じ内容をさす用語である。

表2 国民（民衆）学校の学校形態ごとの生徒数とその割合の変化（1847年～1881年）

	固定型	巡回型	低学年	幼児学校	合計	固定型	巡回型	低学年	幼児学校	合計
1847	99,343	91,964	—	—	191,307	51.9	48.1	—	—	100
1850	143,526	126,178	—	—	269,704	53.2	46.8	—	—	100
1853	152,039	132,033	—	—	284,072	53.5	46.5	—	—	100
1856	159,745	146,483	—	—	306,228	52.2	47.8	—	—	100
1859	174,418	155,824	—	—	330,242	52.8	47.2	—	—	100
1865	189,366	149,745	—	—	339,111	55.8	44.2	—	—	100
1866	189,928	157,121	—	—	347,049	54.7	45.3	—	—	100
1867	194,075	158,287	—	—	352,362	55.1	44.9	—	—	100
1868	200,339	157,616	—	—	357,955	55.9	44.1	—	—	100
1869	208,514	153,445	—	—	361,959	57.6	42.4	—	—	100
1870	214,784	153,928	—	—	368,712	58.3	41.7	—	—	100
1871	224,444	152,806	—	—	377,250	59.5	40.5	—	—	100
1872	233,021	151,429	—	—	384,450	60.6	39.4	—	—	100
1873	239,495	149,565	—	—	389,060	61.5	38.5	—	—	100
1874	244,757	147,789	—	—	392,546	62.4	37.6	—	—	100
1875	249,757	139,837	—	—	389,594	64.1	35.9	—	—	100
1876	238,612	109,452	38,880	185,276	572,220	41.7	19.1	6.8	32.4	100
1877	242,339	102,256	41,593	183,944	570,132	42.5	17.9	7.3	32.3	100
1878	248,566	98,328	43,590	187,107	577,591	43.0	17.0	7.5	32.4	100
1879	249,031	91,450	42,189	188,999	571,669	43.6	16.0	7.4	33.1	100
1880	251,351	86,201	39,503	196,873	573,928	43.8	15.0	6.9	34.3	100
1881	249,879	80,483	42,870	192,753	565,985	44.1	14.2	7.6	34.1	100

校は4年、3年の場合は国民学校が3年であった）が続いた。修業年限は決められていたが、ほとんどの生徒は途中で退学し、卒業試験をうけて合格し、国民学校を卒業する生徒の割合はきわめて少なかった。1876年から1880年にかけての国民学校を正式に卒業した生徒の割合は1.6パーセントとされている¹⁰⁾。なお、この表にはあらわれていないが、学校に通わず、家庭で親が教育を担当する形態（Hemundervisning）もあり、1870年代前半では約1割の子どもがそのような形態を選択し、教区から承認を得ていた*。

学校教育を開始する年齢は1842年の法令で「9歳になるまでに開始される」と規定されただけで、開始年齢は教区ごとに決定できることになっていた。当初は学齡という概念も曖昧で、1882年に改正された国民学校令においてはじめて7歳から14歳とされた¹¹⁾。

* 家庭で親が教育を担当するとされた数字（約10%）の中には、家庭教師を雇用して教育し、その後古典語学校（läroverk）や女学校（flickskola）に入学させる裕福な家庭の子どもが含まれるが、1、2年間だけ民衆学校に通学させた後、家庭で労働に従事している貧困農家の子どもも含まれている。

(2) 民衆（国民）学校への就学実態とその背景

義務教育という理念は1842年に確立したものの、その就学実態は地域でかなり異なっていた。1860年代の国民学校視学官の報告書には、不規則な学校通学に対する視学官の不満が述べられている¹²⁾。ベストエルヨーランド（Västergötland）の視学官が予告なく6校を視察したときに、在籍している生徒数が100名とされている学校の出席者は13名しかいなかった。同様に170名に対して23名、112名に対して25名、170名に対して15名、195名に対して26名、70名に対して3名という、きわめて低い出席率を報告している。しかも、この学校視察はたまたま天気の良い日であったことも付け加えている¹³⁾。別の視学官は「出席者の割合は、8～15%から60～80%といろいろな学校で異なっている」と報告している¹⁴⁾。1876年においてさえ、ハランド（Halland）の視学官は「最悪の学校地区では学齡にある子ども437人のうち18名だけがその学期に登録していた¹⁵⁾」とし、このような就学実態の背景には「多くの子どもにとって学校までの距離が長いこと、学校までの道が悪い状態にあること、親にとって子どもに弁当を持たせることや服や靴を入手することが難しいこと、家での仕事に子どもの助けが必要であるこ

と、あるいは親の貧困さが牧草地の下僕や子守りとして子どもを働きに出していること、親の無理解や無関心」などがあつたとしていた¹⁶⁾。

(3) 補習学校 (fortsättningskolan)

1842年の民衆教育令には学校で獲得した知識を保持する重要性が強調されていたので、その目的のために日曜学校 (söndagsskola) や繰り返り学校 (repetitionskola) が設立された。これらの学校は後に補習学校に再編成されることになる。1864年に政府は国民学校を中退した子どもが獲得した知識をある一定の期間教師の指導のもとで保持し、さらに発展させるように監督する仕事を学校委員会 (skolråden) に委託した。この学校委員会によって、補習学校がさまざまな方法で組織された。ある地域では、国民学校を中退した子どもを対象に4または6週間の期間にわたって補習教育が組織された。別のところでは、通常の国民学校の8ヶ月の期間内に、毎週1日か隔週に1日補習教育が組織された。あるいは、水曜日の午後（この時間帯は国民学校の生徒は学校にいない）や日曜日に補習教育が組織された。多くの補習学校では、キリスト教の知識だけを教えており、ある種の堅信礼に向けた準備教育であった。能力のある生徒がいる場合には、読み書きの練習もなされた¹⁷⁾。

この補習学校の制度は当初うまく定着せず、1872年から1876年の間ほとんど補習学校は「名前だけが残っている状態」(knappt mer än i antydningar) であつたという¹⁸⁾。

1877年の国会において、補習学校に対する国家補助金に関する提案が可決された。この提案のなかで、当時の文部大臣のカールソン (F. F. Carlson) は「補習学校は国民学校を卒業した生徒を受け入れただけではなく、国民学校を怠学したり、何らかの理由で退学になった生徒も受け入れてきた」ことを強調した。この場合、補習学校は国民学校の上におかれる部門 (en högre avdelning) ではなく、国民学校に対する補助施設であつた¹⁹⁾。1877年以降の補習学校は*、国民学校よりもより高い教育を与えることが本来の任務とされた。それとともに、必要な繰り返り

(repetition) によって生徒の能力の向上が目ざされた。教科としては、「聖書を読むことを通して得るキリスト教の知識、スウェーデン語（とりわけ文章を書くことの練習）、実践的な応用に関連した計算と幾何、図画、条件が許せばスロイドまたは手仕事 (handarbete)」から構成された。さらに、「自国史と自然に関する知識（とりわけ農村部では農業に関係ある自然の知識）」が加えられた。年間の授業時数は、「少なくとも6週間（1週20時間）を確保するべきである」とされた。農村部では、「連続して6週間実施するか、6週か8週を2つの学期に分けて実施するか、年間を通して毎週1日（6時間）実施するか」ということになっていた。都市部では、「夜間補習学校 (aftonskolor) においてより適切に実施される」とされ、その授業時間は年間に最低180時間とされた²⁰⁾。

3. 1870年代前半における農村部のスロイド学校

(1) オットー・サロモンの『スロイド学校と国民学校 第1巻』にみられるスロイド学校の実態とその改革課題

オットー・サロモンは、1876年12月に『スロイド学校と国民学校 第1巻』(Slöjdskolan och folkskolan I) を著した。この副題である「スロイド学校はその目的を充たすためにいかに組織されるべきか、そしてそれは国民学校と統合されるべきか?」が示すように、この著作は「日程にのぼつてきた」「実習教科としてのスロイドの国民学校への導入問題」に対するさまざまな誤解を解くために執筆された。100頁に満たないこの著作の目的は、読者にスロイド学校への理解を深めてもらうことにあつた。すなわち、サロモンは、「スロイド学校は国民学校にとってかわるものではなく、国民学校の教育を『労働者 (サロモンの場合、主として農業労働者のことをさしている一引用者)』にとってより完全なものにするためにスロイド学校は不可欠である」ことを説いている。また、逆に「スロイド学校を実現するためには、国民学校が不可欠である」²¹⁾。サロモンにとって、スロイド学校と国民学校とは2つがあいまってはじめて「労働者」にとって意味のある「教育施設」になるのであつた。

本著作の内容を要約すると、サロモンは最初に北欧の農民の冬の過ごし方を問題にし、スロイド（彼は道具を扱うことと定義している）の技能を身につけることによって、剰余の時間をヘムスロイドに使用する重要性を説いている。その次にスロイド学校の目的について論じ、それは「1つあるいは複数の種類のスロイ

* 以下の叙述は、カールソンの提出した補習学校に関する法案の内容である。これらの内容については、1877年9月11日に公布された補習学校に関する法令 (Kungl.kungörelse angående fortsättningskolan) の公布以降において実施されたと考えられる。

ドの技能を教えることとともに、より重要なことは生徒に労働に対する好み (håg) と喜び (lust) の感情を呼び起こし、秩序 (ordning) や正確さ (noggrannhet) の重要さ (vigten) や魅力 (behaget) や利点 (fördelarne) を教えることとともに、注意深さ (uppmärksamhet) や勤勉さ (flit), 忍耐強さ (ihärdighet) の必要性を身につけさせること」であり、そのことによって「生まれつき持っている人も怠惰への傾向 (håg) を克服させることである」とする²⁹⁾。

そのうえで、サロモンはスロイド学校でとりあげられるべきスロイドの種類について検討する。まず男子と女子に要求されるスロイドの種類は異なるとし、最初に男子のスロイドについて以下のように述べる。「農場にとって、鍛冶の技能は重要ではあるが、施設設備に財源を要するという問題点がある。」それに対して、「木工 (snickeri) と木工旋盤 (svarfning) をスロイドとしてとりあげねばならない」とする。その理由は、それらは日常生活でしばしば使用され、家具や道具や家庭用品がそれによってつくられ、原材料である木が豊富にあり、道具も安く、また、生徒の体力の発達にとっても木工は適切だからであるとする³⁰⁾。

次に女子のスロイドについて木工とほぼ同様の理由で裁縫 (sömnad) が重要であるとする*。さらに、ミシン (symaskin) の発明は女性の手工 (handarbete) に革命をもたらしたとし、ミシンが女子のスロイド学校に導入されるべきであるとする。ミシンは、近い将来において多くの農民の家庭に導入されるので、その扱い方をスロイド学校で学ぶことが重要であるとする。サロモンは、裁縫と同様に編み物 (stickning) はスロイド学校にとって適切であるとし、機織り (väfning) は体力が要求されるためにあまり適切ではないとする。また、かご編み細工 (korgmakeri) やわら細工 (halmflätning), 籐細工 (rottingsflätning) もあみ靴の製作 (listskottillverkning) もスロイド学校で教えるスロイドとしてふさわしいとしている³¹⁾。

その後、サロモンは「スロイド学校は国民学校と統合できるか」という問題を議論しているが、その内容はすでに別稿で紹介したので、ここでは省略する³²⁾。さらに、少年のためのスロイド学校にとって製図の技能を獲得させることがきわめて重要であるとし、とり

* サロモンは男子のためのスロイドには座っておこなう種類のスロイドはよくないとしているのに対して、女子にはこの原則はあてはめていない。

わけ線図 (linearritning) を重視すべきであるとする*。

その後、サロモンはスロイド学校を組織するための基礎として、1. 教師 2. 実習室 3. 教科 4. 生徒 5. 授業時間 6. 教材 について彼の考える最低条件について興味深い議論を展開している。本稿の目的は、1870年代前半のスロイド教育の実態について紹介することにあるので、これらの内容については別の機会にゆずる。

(2) 1876年12月におけるスロイド学校一覧とその所在地

サロモンは、「現時点で男子にスロイド教育を実施している」約85校の男子スロイド学校の名称とその中の17校のスロイド学校の概要をこの著作の後半において紹介している。これらの85校の名称については、「アールボーン (C. Ahlborn) から提供された」、また、17校の学校の概要についてはそれぞれのスロイド学校の校長から寄せられた情報にもとづくとサロモンは述べている。この学校の一覧を表3に掲げ、これらの学校の所在地を当時のスウェーデンの地図をもとに図1に示す**。

この図1から、1876年には多くのスロイド学校は農村部に位置していたこと、かなり特定の地域に集中して存在したことがわかる。農村部に位置していたことは、スロイド学校の問題が農村部の貧困農家の子弟の教育の問題とかがかかわっていたことが背景にあった。スウェーデン南部に多く、北部に少ないのは、北部は森林地帯であり、

* この当時に国民学校における製図教育をめぐって、2つの対立する見解が存在した。一つはフリーハンドのスケッチ (frihandsteckning) を重視する見解と他の一つは線図を重視する見解であった。サロモンは個人の才能の違いによらないで誰もが獲得すべき能力を重視する観点から線図をスロイド学校で教えるべきであるとした。サロモンは1876年に *Kortfattad handledning i linearritning* (線図のための手引き) を出版している。

** 当時のスウェーデンの地図については、*Nationalencyklopedin, band 17, sid 499*, 1995, Bokförlaget Bra Böcker i Höganäs を参照した。なお、10. ノイミュラー・スロイド学校 (Neumüllers slöjdskolan) と56. エケルード・スロイド学校 (Ekeruds slöjdskola) については不明である。ただし、前者については、ストックホルム県に、後者についてはエルフスボリ県にある。

表3 オットー・サロモンの*Slöjdskolan och folkskolan* I (1876) において掲げられたスロイド学校一覧

ストックホルム市
1. 子どもの家 (Barnhemmet i Stockholm)
2. アドルフ・フレドリック教区国民学校 (Adolf Fredrjks församlings folkskola)
3. ヨハネスプラン師範学校 (Normalskolan å Johannesplan i Stockholm)
4. ラドゥゴードランド教区国民学校 (Ladugårdslands församlings folkskola)
5. ブルンケベリイェ・ホテル・スロイド学校 (Nya slöjdskolan i Brunkebergs hotell)
6. モサイスカ教区学校 (Mosaiska församlingens skola i Stockholm)
ストックホルム県
7. ブレンシルカ教区スロイド学校 (Brännkyrka församlings slöjdskola)
8. ブレンシルカ教区子どもの家 (Brännkyrka församlings barnhem)
9. ヴィンクラシュカ・スロイド学校 (Vinklarska slöjdskolan)
10. ノイミュラー・スロイド学校 (Neumüllers slöjdskola)
11. ゴーロン・プリンスカ・カール養育施設 (Prins Carls uppfostringsanstalt å Gålön)
12. ヴェルムドール・スロイド学校 (Wermdö slöjdskola)
13. ヴェステルハニンゲ・スロイド学校 (Westerhaninge slöjdskola)
14. オステルハニンゲ・スロイド学校 (Österhaninge slöjdskola)
15. ロー・スロイド学校 (Röö slöjdskola)
16. ボートシルカ・スロイド学校 (Botkyrka slöjdskola)
17. フディング・スロイド学校 (Huddinge slöjdskola)
ウプサラ県
18. ウプサラ・スロイド学校 (Upsala slöjdskola)
ソーデルマンランド県
19. クラーストルプ・スロイド学校 (Claestorps slöjdskola)
20. ニーショーピング・スロイド学校 (Nyköpings slöjdskola)
21. ヴィーロ・ブルク・スロイド学校 (Wirå bruks slöjdskola)
ヨンショーピング県
22. コーシュベリ教区スロイド学校 (Korsbergs församlings folkskola)
23. アールスヘダ教区子どもの家 (Alsheda pastorats barnhem)
24. ログベリヤ教区国民学校 (Rogberga församlings folkskola)
25. ヨンショーピング西国民学校 (Jönköpings vestra folkskola)
カルマル県
26. オスカールシュハムン・スロイド学校 (Oskarshamns slöjdskola)
27. ヴィンメルビー・スロイド学校 (Wimmerby slöjdskola)
28. ヴェステルヴィーク・スロイド学校 (Westerviks slöjdskola)
29. トゥーナ・スロイド学校 (Tuna slöjdskola)
30. ヨーテード・スロイド学校 (Hjorteds slöjdskola)
31. フローフルト・スロイド学校 (Flohults slöjdskola)
32. トールネスファラ・スロイド学校 (Törnesfälla slöjdskola)
33. ユングビー・コミュニケーション・スロイド学校 (5校) (Ljungby kommuns slöjdskola)
34. エード・スロイド (Eds slöjdskola)
35. ニュブロ・スロイド学校 (Nybro slöjdskola)
ゴットランド県
36. ヴィースビ・スロイド学校 (Wisby slöjdskola)
ブレーキング県
37. カールスクローナ・スロイド学校 (Carlskrona slöjdskola)
クリシャンスタ県
38. エンネスタード国民高等学校 (Folkhögskolan Önnestad)
マルメヒュース県
39. ランズクローナ・スロイド学校 (Landskrona slöjdskola)
イエーテボリ・ボヒュース県
40. イェーテボリ・分離学校 (Afsöndringsskolan Göteborg)

41. グスタフスベリ・子どもの家 (Gustafsbergs barnhus)
 42. シンメルスリョード・少年スロイド学校 (Simmersröds slöjdskola för gossar)
 43. ヴィリーンスカ学校 (Wilinska skolan)
 44. シルヴァンデシュカ・スロイド学校 (Silvanderska slöjdskola)
- エルフスボリ県
45. ヴェーネシュボリ・スロイド学校 (Wenersborgs slöjdskola)
 46. ヴェーネシュボリ・国民学校 (Wenersborgs folkskola)
 47. オーモル・スロイド学校 (Åmåls slöjdskola)
 48. アーリングソース・国民学校 (Alingsås folkskola)
 49. ウルリーセハムン・スロイド学校 (Ulricehamns slöjdskola)
 50. シェーリングスホルム・スロイド学校 (Kölingsholms slöjdskola)
 51. ラーグマンセレード・スロイド学校 (Lagmansereds slöjdskola)
 52. エスタード・子どもの家 (Östad barnhus)
 53. ボールスタード・スロイド学校 (Bolstads slöjdskola)
 54. フェリエランダ・スロイド学校 (Ferglanda slöjdskola)
 55. ネース・スロイド学校 (2校) (Näås slöjdskola)
 56. エーケルード・スロイド学校 (Ekeruds slöjdskola)
 57. ヘッスナ・スロイド学校 (Hössna slöjdskola)
 58. リーアレード・スロイド学校 (Liareds slöjdskola)
 59. アーラフォシュ・スロイド学校 (Alafors slöjdskola)
 60. エール・スロイド学校 (Örs slöjdskola)
- スカーラボリ県
61. リードショーバング・スロイド学校 (Lidköpings slöjdskola)
- ヴェルムランド県
62. カールスタード国民学校教師セミナーウム (Folkskolelärareseminariet i Carlstad)
- オレブロ県
63. オレブロ・スロイド学校 (Örebro slöjdskola)
 64. アスケルスンド・スロイド学校 (Askersunds slöjdskola)
 65. エーズベリ・スロイド学校 (Edsbergs slöjdskola)
 66. スナフルンダ・スロイド学校 (Snafunda slöjdskola)
 67. アスケル・スロイド出校 (Asker slöjdskola)
 68. ヴェスタ・スロイド学校 (Westa slöjdskola)
 69. ノーラ・ベリイ教区スロイド学校 (Nora Bergs församlings slöjdskola)
 70. ヴィーボ・スロイド学校 (Wibo slöjdskola) (2校)
- ヴェストマンランド県
71. アルボーガ・スロイド学校 (Arboga slöjdskola)
- コッパルベリ県
72. ファール・スロイド学校 (Falun slöjdskola)
 73. ヘーデムーラ・スロイド学校 (Hedemora slöjdskola)
 74. ティスクブー・スロイド学校 (Tyskbo slöjdskola)
 75. エッペルブー・スロイド学校 (Äppelbos slöjdskola)
 76. マールグン・スロイド学枢 (Malugns slöjdskola)
 77. フォルケルナ・スロイド学校 (Folkerna slöjdskola)
 78. フースビ・スロイド学校 (Husby slöjdskola)
- ヴェステルノルランド県
79. ヘルネサンド・スロイド学校 (Hernösands slöjdskola)
- イエムトランド県
80. ブルーンフロー・スロイド学校 (Brunflo slöjdskola)
- ヴェステルボッテン県
81. ウメオ・スロイド学校 (Umeå slöjdskola)
 82. ブールトレクス・スロイド学校 (Burträsk slöjdskola)
 83. ローフォンゲルス・スロイド学校 (Löfångers slöjdskola)
 84. ロバートフォシュ・スロイド学校 (Robertsfors slöjdskola)
- ノルボッテン県
85. ピテオ・スロイド学校 (Piteå slöjdskola)

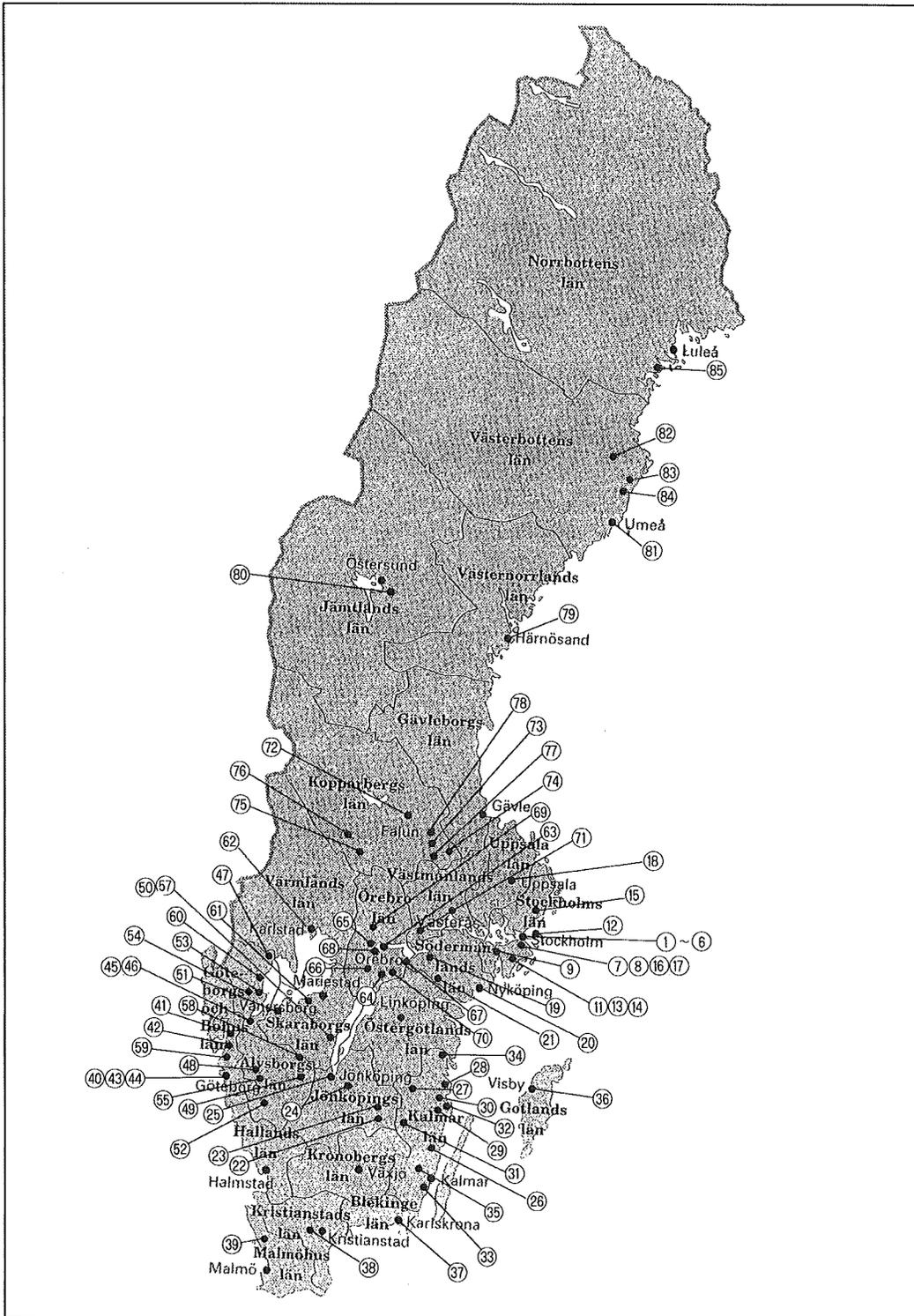


図1 1876年のスロイド学校の所在地

(図1のなかでゴシック体でかかれた文字は県の名称であり、そうでないものは都市の名称である。)

人口がきわめて希薄であったからであると考えられる。また、特定の地域に集中しているのは、各地域の農業経済会議所や地方議会などのスロイド教育問題に対する取り組みやその地域の指導者層のこの問題に対する関心の大きさの差によるものと考えられる*。図1において男子スロイド学校が学校が存在しない県は、Öster-götland, Gävleborg, Kronoberg, Hallandの4県であった(当時スウェーデンには25の県が存在した)。

なお、サロモンは、このスロイド学校一覧の中のイエーテボリ県のところに注を付け、「それ以外に約90の女子スロイド学校がある」と書いている。また、オレブロ県のところにも注を付け、「これ以外に23の少女スロイド学校がある」と書いており、女子のためのスロイド学校が少なくなかったことを示唆している。

(3) 1870年代前半のスロイド学校の実態

サロモンはこの著作において17校のスロイド学校の概要を紹介しているが、そのなかには、ネース・少年スロイド学校やネース・スロイド教員養成所についても書かれている。スロイド教員養成を目的とする後者についてはスロイド学校と同種の施設ではないので、ここでは省略する。また、ネース・少年スロイド学校についても、別稿²⁶⁾においてすでに紹介したので省略する。以下に紹介するスロイド学校の概要に関する部分のなかの引用は、すべてOtto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I (1876)* からのものである。

①フローフルト・スロイド学校 (*Flohults slöjdskola*) (カルマル県) (表-③)

このスロイド学校は1872年に開校された。少年スロイド学校の教師の給料は年額350クローネで、他に賃貸料無料の住居と薪が提供される。少女スロイド学校の女性教師には時給25オーレ**の賃金と賃貸料無料の住居と薪が提供される。このスロイド学校は国民学校と連携して運営されているので、毎日実際に配当さ

* アールボーンが1875年にグーラナ地方を講演で回った際の報告書 (*Berättelse af Ornamentbildhuggaren C. Ahlborn rörande hans resa och verksamhet för husslöjdens upphjelpande i Dalarna år 1875*) には、各地域の指導者層の姿勢の違いによってスロイド教育問題へ対応が大きく異なることが述べられている。

** オーレは貨幣単位で、100オーレが1クローネと等価である。

れた学習時間の中のうちの1時間はスロイドにあてられ、それ以外にも約2時間の休憩時間がスロイドにあてられている*。子どもの年齢は7歳から15歳で、その数は40人から50人である。

女子生徒は「あらゆる種類の裁縫、マークつけ、編み物、わら細工、あみ靴の製作等」を学ぶ。男子生徒は「簡単な木工、木靴、ブラシ、鞭、木製スプーン、ひしゃく、織物用シャトル、大小の机、糸巻き、まな板、はかり、玩具、調味料用棚、桶、簡単な農業用具の製作とかご編み細工」を学ぶ。製作物の販売は、一部はオークションにおいて、一部はスロイドの展示会において個人的に行われる。販売総額の一部は生徒たちの奨励金として、他の一部はストックホルムにある貯蓄銀行に預けられる。

学校の活動の経験は「スロイド学校は国民学校と連携して活動すべきこと、子どもの道徳がそれによって高められ、そして両方の学校での学習の交代によって子どもの学習は特別に改善され、減少した学習時間を増大した興味によって取り戻されることを証明した」。

授業では、「一般的な (*allmänna*) スロイド、単純な (*gröfre*) スロイド」が教えられ、すぐれた能力を示す子どもには「きめ細かな (*finare*) スロイド」が教えられる。もし、学校財政に余裕があれば、子どもの好みを刺激し、新しい仕事に関心をもたせるために、他のスロイド教師が雇用される。特別に勤勉さや巧みさをみせる子どもには道具が報奨として与えられる。

②トールネスファラ・スロイド学校 (*Törneshalla Slöjdskola*) (カルマル県) (表-④)

このスロイド学校は、1873年秋にその活動を始めた。そこでの教育は週に2~3回教えられ、実際には冬季(10月から4月)にのみ行われる。このような制限された授業時間の理由は、一つは「夏季に生徒を農業の労働力として使用する両親の必要性和学校通学とが衝突しないため」であり、さらには「スロイド学校での生徒の労働への嗜好が毎日の通学による疲労から減退しないようにするため」である。

このスロイド学校は主に国民学校を出た少年を受け入れており、「スロイドの補習コース(繰り返しコース (*repetitionskurs*))」を提供している。それは「国民学校のスロイド教育のための授業時間がいつもあまりに少なく、分断されており」「また同様に国民

* 「約2時間の休憩時間 (*loftiden*)」の実態的意味が不明であるが、原文通りに翻訳した。

学校の生徒が一般的に最も簡単な道具でさえ、安定して使用することができるにはあまりに年少であるからである」。

学校には一人の校長が雇用され、毎日の授業日ごとに日給を受け取る。必要がある場合は、彼の補助者として特殊なスロイドを教える人を雇うことができる。生徒の数は9人から15人で、「旋盤作業(svarvning)*、簡単な木製スプーンや丁寧に仕上げられた木製スプーン、道具の製作、桶板、ブラシ製造、わら細工、ハンダづけ、油塗り、窓ガラスをはめる作業等」を学んでいる。

③ユングビー・コミュニオン・スロイド学校 (Ljungby kommuns Slöjdsolor) (カルマル県) (表-③)

ユングビー・コミュニオン**には5つの国民学校があり、それぞれにスロイド学校が附設されており、各スロイド学校では男子のスロイドと女子のスロイドが週に1日教えられている（通常は土曜日）。これらのスロイド学校がその活動を始めたのは1875年10月であったが、「実際には1876年にすべてのスロイド学校が軌道にのった」。男子のスロイドでは、「単純なスロイド、馬鞍の製作、かご編み細工」が教えられている。女子のスロイドでは、「太い糸の針仕事と細い糸の針仕事、糸紡ぎ、編み物、洗濯とアイロンかけ、服の裁断、クローセ編み(virkning)、刺繍、マット修理、わら細工」が教えられている。生徒の数は171人で、その内訳は男子は63人、女子は108人である。授業時間数は「通例1日5～6時間であり」、教師は「地域の相場にしたがって月給を、または日給として1～2クローネを受け取る」。

ユングビー・コミュニオン・スロイド学校のいくつかの学校では、ほとんどの道具はコミュニオンによって購入され、子どもによって製作されたものはオークションで販売される。他のスロイド学校では、教師の監督のもとで修理したり、製作したりするための仕事を子

* 旋盤作業とは、この時期においては木工旋盤での作業である。

** コミュニオン(kommun)は、1862年の改革において創設された地方自治組織である。それ以前にはスウェーデンには教区(socknar)と都市(städer)しか存在しなかった。農村部では、教会の支配権が大きかった。1862年の改革によって教区は宗教的な問題(教会の修理など)だけを扱うことになった。すべての教区は1862年の改革によって同時にコミュニオンになった。コミュニオンはあらゆる政治的・社会的問題を扱うことになった。

どもが家庭から持ってくる。

学齢にある子どもはスロイド学校への出席が義務づけられている。

④エード・スロイド学校 (Eds Slöjdskola) (カルマル県) (表-④)

エード・スロイド学校は1873年秋に開校され、「国民学校と連携して」運営されてきた。男子生徒は隔日にスロイド学校と国民学校に通学している。最初の2年間、「木工と靴の製造(skomakeri)の授業が行われた」が、靴の製造については「生徒の関心はあまり高くないので、次第に取り組みなくなり、昨年には木工だけとなった」。これまでの生徒の最大数は14人で、年齢は11歳から14歳であった。授業では、「主に鋸、斧、ナイフ、鉋、ドリル、ハンマーなどの道具の使用法」を教えており、それらの道具はイスを製作するときに必要となるので、「ほとんどの生徒はイス製作に従事している」。「旋盤作業や彫刻」も教えられるが、「それらは関心と才能を示した生徒のみ」に対して実施される。年少の生徒は、「名札、編み物用の道具、ほうきなど」を製作している。その他には、「異なるモデル(台所用、庭園用、子ども用、休日用)にしたがってイスを製作し、さらに小さなテーブル、糸巻き、ステッキ、ペーパーナイフ等の小さなもの」を製作している。教師には年額200クローネの給料と賃貸料無料の住居が提供される。

⑤ヴィンメルビー・スロイド学校 (Wimmerby Slöjdskola) (カルマル県) (表-⑤)

この学校は水曜日と土曜日に午前9時から午後4時まで開かれて、10歳から12歳の年齢の28人の生徒が教育を受けている。スロイド教育の目的は、「小さな家具の製作、彫刻、糸のこ作業の技能を教えること」である。教師には年額500クローネの給料と賃貸料無料の住居が提供される。生徒により製作されたものはオークションにおいて販売される。

⑥ランズクローナ・スロイド学校 (Landskrona Slöjdsolor) (マルメヒュース県) (表-⑥)

この学校は、男子スロイド学校と女子スロイド学校からなる。男子スロイド学校では「425人の生徒が6つの学年に分けられ、その中の2つの低学年では、年少の生徒が30人ずつのクラス」で教えられており、「他の4つの学年では60人ずつのクラス」で教えられている。「最年長のクラス(第6学年)では、スロイドが教えられ」、「木工、旋盤作業、糸のこ作業」が教

えられている。第6学年では、「生徒によって在籍年数が異なる（1年間から3年間）が、その期間においてスロイドが学ばれる」。一日の授業時間は5時間の日と6時間の日があり、一日おきに交代で行われ、午前中に4時間、午後2時間の日と、午前中に3時間、午後2時間の日がある。これらの時間において、クラスを半分に分け（30人ずつ）、午前と午後で交代で毎日2時間スロイドが教えられている。クラスの他の半分は、その時間には国民学校での普通教科の授業を受ける。そのようにして、各生徒は毎日2時間のスロイドの授業を受けている。「スロイド学校でクラスの半分だけが同時に授業を受けるのは、教室と教師の不足のためである」。スロイド学校には一人のスロイド教師だけがおり、毎日4時間の授業を行い、年額600クローネの給料を受け取る。

作業場には「8つの旋盤と6つの鉋台があり、それらとその他に道具の購入に1,172クローネを必要とした」。製作されたものは、学校の経費のために販売され、一部は卒業試験の際の展示会において、一部は個人的に販売される。そのようにして得られた資金は道具のメンテナンスに必要な経費や材料の購入にも使用される。また、それらの必要経費や材料代を除いた剰余金は生徒に報奨金として与えられる。

男子スロイド学校では、「盆、箱、手桶、工具の柄、痰壺、いろいろな種類のモデル」を製作する。一部の生徒は糸のこ作業を行う。教師は一定のガイダンスの後、生徒自身が作業を遂行することを重視しており、「他人の援助によって完璧な作品にするよりも、あまりいい作品でなくても、自分で仕上げることが重視されている」。「生徒たちは正規の作業時間以外にも喜々として作業場に来ている」。

女子スロイド学校では、約500人の生徒が6つの学年に分けられている。「上の3つの学年において（そこには、9歳から14歳の150人の女子生徒が属しているが）、編み物、裁縫、けば立て作業、糸紡ぎ、機織り」を、2人の女教師によって毎日3時間学んでいる。授業は、2つある特別室において行われており、「1つの部屋には裁縫台と長いす、もう1つの部屋には4台の機織り機、2台のひも編み機、24台の紡ぎ機、4台の糸まき機等」がおかれている。すべての道具類に要した経費は944クローネであった。

⑦シルヴァンデシュカ・スロイド学校 (*Silvanderska Slöjdskolan*) (イエーテボリ・ボヒュース県) (表-44)

この学校の建物は「スロイド学校のために（独自に）

建てられた建物」で、1875年5月31日に落成式を行った。このスロイド学校ではコミュニンの2つの国民学校からそれぞれ12人の男子生徒が交代で隔週に来て、午後1時から4時までスロイドの授業を受ける。それらの生徒たちの年齢は12歳から14歳で、国民学校の高級段階 (*högre avdelning*) に属し、午前8時から12時までではそこで授業を受けている。教師は年額600クローネの給料と賃貸料無料の住居と薪と灯油が提供される。

スロイド学校で製作しているものは、「たらい、机、熊手、鋸立てのような生活用品、手押し車やスコップ」である。

⑧ヴェーネシュボリ・スロイド学校 (*Wenersborgs Slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-45)

この教育施設はエルフスボリ県のスロイド協会によって雇われたスロイド教師と製図教師によって管理されている。本格的な活動は「1875年に開始され、現在に至っている」。このスロイド学校は、「年中ほとんど毎日開かれ、10人から15人の生徒が訪れている」。

「現在の条件では、スロイドのさまざまな種類のもを教えることはできない」ので、各々の生徒の適性と能力にしたがって労働の分割が行われている。その製作物の販売は、一部はストックホルムの店舗で行われ、一部はオークションや個人的に販売される。

⑨ヴェーネシュボリ・国民学校 (*Wenersborgs Folkskola*) (エルフスボリ県) (表-46)

この学校では、スロイド教育は男子女子ともに「上級の2つの学年において必修とされている」。30年前には既に女子に手工 (*handarbete*) が教えられていた。男子には1872年にスロイド教育が導入された。低学年のクラスには、8歳から15歳までの生徒がおり、このクラスを修了するには3年間を要する。「通例では11歳で中学年のクラスに移り、スロイド教育を受けるようになる。中学年と高学年では、修了するにはそれぞれ2年間を必要とする。また、この中・高学年では、一つのクラスの生徒を半分ずつに分け、片方が座学の学習をしているときに、他方はスロイドの授業を受けている。国民学校で教えなければならない知識量の中・高学年の4年間の中でその半分の時間でこなしているのは先に述べたように生徒を半分ずつに分けているからである」。

鍛冶担当と木工担当の教師の給料は、それぞれ年額600クローネであり、靴の製作と服の仕立ての担当の教師の給料はそれぞれ年額500クローネである。これ

らのスロイドを担当するのは、町に住む職人であり、彼らの教授時間は通常の学校の教師と同じで、1年のうちの9カ月間で週30時間である。スロイド担当の女性の教師の給料は（仕事の内容によって）年額400クローネか250クローネである。国民学校の校長の給料は年額600クローネである。

スロイドの授業で製作されるものは、さまざまな種類のものがあるが、「主として労働者の家庭で役立つような簡単なもの」である。女子は、「繊維の準備作業、糸紡ぎと機織り、その後いろいろな種類の服を縫い、クローセ編み、編み物、マーキング」などを学ぶ。男子は「靴職人と仕立屋のもとでいたんだ靴や服を修理し、新しいものも作る」。鍛冶では、「単純な工具、例えばハンマー、はさみ、パール、馬蹄、木の実割り、砂糖はさみ、スパナ等」をつくる。さらに、その他に注文によってさまざまなものがつくられる。「木工職人のもとで家具や台所用品が作られる」。すべての製品は、その販売価格が低く設定されている（ほとんど材料代に等しい）ので、売れやすい。

生徒数は、1876年秋学期には中学年で男子55人女子67人、高学年で男子38人女子46人であった。学校への通学状況は「ヴェーネシュボリではとてもよく、怠学は数回起こるくらいのものである。怠学は「男子生徒の間で発生するが、スロイドの授業では起こっていない」。スロイドの授業が導入されてから、「生徒は以前と同じコースをより容易に、より短い時間（半分）で学ぶこと」が示された。

⑩ウルリーセハムン・スロイド学校 (*Ulricehamns Slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-④⑨)

このスロイド学校は1875年11月に設立された。国民学校の建物の一部である2つの広い部屋を市の負担で（無償で）この学校が利用できるようにし、さらにかなり豊富なモデル・コレクションのための特別な部屋が貸与された。「家具職人でもある教師は、1週間に1日教える義務とモデル・コレクションの管理という仕事に対して年額200クローネの給料を受け取る」。生徒数は約30人で、その年齢は10歳から17歳である。この学校では「より簡単なスロイドの製品がつくられ、おけ、足台、簡単な玩具の彫刻」などがつくられている。それとともに、「かご編み細工の導入」が予定されている。このスロイド学校は活動を始めて短期間しか経過したに過ぎないが、「その良い効果はすでに顕著で、世間に承認されてきた」。

⑪シェーリングスホルム・スロイド学校 (*Köllingsholms Slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-⑤⑩)

このスロイド学校は、「2つのかなり大きいスロイドの作業室と教師の住居よりなる建物がこの学校のために新設され」、1875年8月にその活動を開始した。生徒の数は男子23人と女子20人である。彼らは、ほとんどが同時に国民学校の生徒でもあり、その年齢は10歳から15歳である。毎土曜日の午前9時からが、このスロイド学校の男子生徒と裁縫学校 (*Syskolan*) の女子生徒にとっての通常の作業日であり、授業日である。男子生徒は「一週間経過した後は、生徒が望むときに教師の指導のもとで作業するためにスロイド学校に来ることができ、教師は常にその場にいなければならない」。男子生徒の授業料は無料であり、学校にある道具を使用することができ、最初は自分の製作するものの材料も無料である。女子生徒も同様に授業料は無料であり、貧困な家庭の出身者は裁縫の材料費も無料となる。

教師は給料として年額400クローネ、無料の薪と野菜畑が貸与される。彼の労働時間は1日に10時間で4週間の休暇が与えられる。

この学校は、農業後継者にできるだけ多くのスロイド技能を教えることを任務としている。つまり、「冬の夕方や時間と機会がある時に、道具や簡単な台所用具をつくることのできるような技能」を教える。その意味するところは「スロイド学校が農民を手工職人の分野に引き込むことでなく、農民をできるだけ手工職人に頼らないようにすること」である。それゆえ、生徒は「簡単なイスマ机、熊手、木製スコップ、まぐわなど、いわば日々の生活に必要なものをつくること」を学ぶ。女子は「裁断し、服を縫い、カバーや靴下などを編む」。生徒がつくったものは、地域で販売される。

裁縫学校の教師は毎週土曜日の教授義務に対して年50クローネを受け取る。

生徒たちはその作業をとて楽しみ、興味を感じている。「毎朝所定の時刻を待ちきれなくて早く来ている」。男子は「特別な製図教育」を受けている。

⑫ラーグマンセレード・スロイド学校 (*Lagmansereds Slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-⑤⑪)

このスロイド学校は1871年9月に設立された。最初の構想は「スロイド学校とそこにあった国民学校とを統合することを追求した」が、「国民学校の教師がスロイドの教育を担当することの能力不足とその意思がないことが判明した」ので、スロイド学校は国民学校

とは統合せず、そのために建物が新設された。そこには、モデル・コレクションのための部屋と採用されたスロイド教師のための部屋とが含まれている。その教師の給料は一日につき2クローネである。授業日数は年間で55日から65日である。生徒数は10人から12人で、年齢は11歳から14歳である。

スロイド学校で「これまで行ってきた作業は糸のこ作業」であった。「この作業を通して製作されたものは、生徒にとって実践的に利用できるものではなく、さらに販売することも難しいので、これからはスロイドとして木工を導入することが現在検討されている」。

⑬フェリェランダ・スロイド学校 (Ferglanda slöjdskola) (エルフスボリ県) (表-⑭)

その学校は1876年3月にその活動を開始した(「ただし、現在活動休止中である」とサロモンは注記している)。これまでにこの学校の活動に25人の生徒が参加した。彼らの年齢は、10歳から19歳であった。一日の授業時間は朝6時から夕方7時までで、そのなかに2時間の休息を含んでいる。授業は一人の教師によって担当され、「製図、木工、糸のこ作業、旋盤作業」が教えられている。彼の給料は一日につき1クローネ50オーレである。

授業において製作されたものは「大部分がその地域で販売される机やイス等の家具」であった。また「注文によって家庭に必要な小物を製作」した。「春と夏の間、学校は特別に借用した部屋で授業を行うが、生徒の参加状況はよくなかった。その原因は「農業や放牧にとって労働力が不足しており、年少者が労働力として必要である」からである。それに対して、秋にはスロイド学校は国民学校と同じ建物の中で活動しているので、スロイド学校への参加者は多くなった。男子生徒たちは「国民学校が始まる前の早朝にスロイド学校に来て、あるいは国民学校の授業が終わった後にスロイド学校に残って活動している」。この学校での経験は「スロイド学校が国民学校と統合されることが望ましいことを示している」。

⑭ネース・少女スロイド学校 (Näas Slöjdskola för flickor) (エルフスボリ県) (表-⑮)

この教育施設 (uppföstringsanstalt) は1874年3月25日に創設された。その目的は、「国民学校法令が女子に対して学習させることを要求している多数の教科を教えるとともに、女性のハンドスロイドの技能、手と器械による機織り、紡ぎ、裁縫、さらに編み物、掃除、料理等を教える」ことである。学校の授業は1

年のうち10カ月半行われ、1日に夏期は8時間、冬期は6時間である。授業は学校長と一人の女性教師により担当され、一人の特別な教師(今のところネース・スロイドセミナリウムの一人の生徒である)が低学年の算術を担当している。

生徒は12歳から15歳以下に示す2つのクラス(それぞれが1年制)に分かれる。生徒数は現在で15人である。冬学期の各クラスの授業時間を以下に示す。

	第1クラス	第2クラス
キリスト教	5時間	6時間
歴史	1時間	2時間
地理	1時間	2時間
スウェーデン語	1時間	4時間
算術	3時間	6時間
「家政学」	3時間	—
清書	1時間	1時間
手工 (handarbete)	21時間	15時間

「夏季には各々のクラスにさらに週に12時間の手工が加わる」。第1クラスの生徒は出席ごとに一日25オーレの補償金を受け取る。また、このクラスの生徒は週に1、2回の筆記テストが課される。

⑯ヴェスタ・スロイド学校 (Westa Slöjdskola) (オレブロ県) (表-⑰)

この教育施設は1875年11月7日に開設された。「1年のうちで4カ月間この学校において国民学校の男子生徒を対象に授業がなされ、1週間のうちの4日間午前9時から午後1時まで、木工、糸のこ作業、彫刻が教えられる」。国民学校の教師はスロイドを教えることが出来るので、スロイド教育を担当している。

⑰ティスクブー・スロイド学校 (Tyskbo Slöjdskola) (コッパルベリ県) (表-⑱)

このスロイド学校は、「ティスクブー国民学校の生徒のために自力で道具を調達し、部屋を借り、教育経費を払うという国民学校教師の熱意」によって1875年に設立された。国民学校の生徒は同時に授業を受ける2つのグループに分けられ、「高学年の方のグループは最小限のコース (minimim kurs) をすでに学習した生徒」で、「彼らはスロイドの作業場の規則にしたがって毎週水曜日と土曜日の午後に作業を行い、また、教師の都合がよければ、時には土曜日全日、あるいは週の別の日の特定の時間に作業すること」ができる。スロイド学校が土曜日に活動していて、他の国

民学校の生徒は休日であるので、国民学校教師はスロイド学校の手話をする。他の日については生徒の手話と指導を国民学校教師以外の人間が担当する。生徒の数は約20人である。

生徒は「旋盤作業より簡単な木工に従事し、糸巻き、台所と家事のためのさまざまな小物、ハンガー、瓶の栓、樽の栓、小箱、道具の柄、パンをこねるための道具、糸のこのフレーム、熊手、バター用スコップ、バター圧搾器等を製作する。彫刻や糸のこ作業、ブラシ製造やわら細工、かご編み細工、いろいろな玩具、金属加工等」も行なう。

⑩ウメオ・スロイド学校（Umeå slöjdskola）

（ヴェステルボッテン県）（表-⑩）

このスロイド学校の目的は、「1年または2年間で1つのコースを修了した人が将来において大抵の場合自分で自らの必要をみたせる、または副収入として金銭を稼ぐことができるように、また生活の糧として自分の技能を生かせることができるような、労働技能または訓練された資質の育成」である。スロイド学校は国民学校から完全に独立している。この学校の生徒としては、17歳から27歳の年齢になっており、単によい資質をもっているだけではなく、「以前に旋盤作業や木工、その他のスロイドについて訓練を受けていること」が求められる。スウェーデンの北部にあるヴェステルボッテン地方は、「僻地で主に森林地からなり、まばらな人口で成り立った広い面積の地域」と特徴づけられる。そのような地域では、日常生活に必要なものをつくることに重点をおく必要があった。

この地方のいろいろな地域から生徒を獲得することはコミュニケーションにとって懸案事項であった。スロイド学校の施設・設備・教師の給料などへの補助金がコミュニケーションによって予算措置された。この10年間に、とりわけ1867年の不作以降、スロイド教育に取り組むという問題が農業会議で何度も提起されたが、「この問題に対する一般の人々の考え方は好意的でなかったので、問題の解決に向けた取り組みは前進しなかった」。1867年から地方議会（landsting）によってある強力な措置がとられた。その措置は、「不作や少ない労働収入によって貧困に苦しんでいる多くの人々に労働機会を提供するための措置」であった。

ヴェステルボッテン県のスロイド学校の設定は、「現在は国家公務員として一時的に雇用されている技師ラムストローム（A. F. Ramström）によりこの10年間刑務所の囚人に対して教えられたスロイド教育から出発した」といわれている。このスロイド教育

は単に囚人だけでなく、看守や他の職員にも広がった。そこで製作されたものは、「麦わらマット、かご細工、ブラシ細工、鉄に関する仕事」であった。このような準備期間を経て、一人の人間が多く種類の技能を練習した後に農業経済会議所の管理委員会の配慮によって、また地方議会の予算措置によって1873年秋にウメオ市にスロイド学校が開校された。そこでは上記のラムストローム氏以外にも旋盤加工職人とブラシ製造職人がスロイドの教師として115日間通常の日給で雇われ、7人の生徒のスロイド教育を担当した。展示会において生徒たちは報奨金として110クローネを受け取り、その中の10クローネが貯蓄銀行に預けられた。オークションでは製作物は167クローネ8オーレで販売された。

1874/75年度は冬にスロイド学校が5カ月間活動を行った。41人の生徒が活動し、その中で13人がコミュニケーションから派遣されたか、または県のいろいろな地域から個人としてやってきた正規の生徒で、その他はウメオ市や他の町の学校の生徒であった。展示会において生徒たちは報奨金として130クローネを受け取った。オークションでは製作物は270クローネ88オーレで販売された。

1875/76年度は冬季に5カ月間、13人の正規の生徒に対してスロイド教育がなされた。「材木の切断や動物の角の旋盤加工等」が行われた。この年度に製作された39の作品がノルショーピンの農業会議において展示され、1等賞が授与された。その次の年の冬にスロイド学校のために4つの部屋が借用され、その1つはスロイド教師のために、2つの部屋が作業場のために、1つの部屋がモデルのための部屋とされた。

スロイド担当の教師は年額500クローネを給料として、それに加えて1つの部屋を賃貸料無料で提供され、灯油、薪を無償で提供される。教師は「いろいろなことができなければならない。それゆえ、ウプサラ・スロイド学校やクラウストープ・スロイド学校で滞り、研修を受け、またノルショーピンの農業会議で研修を受ける」ことができた。スロイド学校が休みの間に、彼はスロイド学校のためのモデルを製作する。そのモデルの一部は新しく建設されるスロイド学校に送られ、他の部分はコミュニケーションへ送られる。そのモデルは国民学校へ送られ、その利用を希望する人が自由に借りることができるようにされた。

学校に年少の男子を生徒として採用することは目的に合っていなかった。一番年長の正規の生徒は31歳で、あとは25歳、20歳、18歳、17歳、そして一番下が15歳であった。

ここでのスロイド教育は、「国民学校が交通の不便な遠隔地を巡回方式で対応したように、巡回方式を取らねばならない。農民の子どもは家庭でよりその年齢に適した仕事をおこなう豊かな機会がある」。

4. 1877年改革によるスロイド学校の変容の萌芽

(1) 1877年改革の概要

ここで1877年改革の概要について述べる。本稿でいう1877年改革とは、男子に対するスロイド教育を適切な仕方でも組織した国民学校への国庫補助金を決定した国会決議を受けて公布された1877年9月11日付法令「スロイドの教育について」(Kungl. Maj:t d. 11 Sept. 1877 “Om undervisning i slöjd”)をさしている。この法令は、国民学校へスロイド教科を導入する改革の大きな契機になった。『民衆(学校)教育に関する諸法令——学校委員会のための指導書』(Folkskolestadgan med flera författningar rörande folkundervisningen. Tilledning för skolråden, 1880)によれば、この法令による借置の概要は以下のとおりである。

「国会ではすでに総額15,000クローナの国庫補助金を国民学校における男子に対するスロイド教育の促進のために支出することを決定した。」「この教育は職業における技能を教えることを目的とするのではなく、普通に存在する道具、まず大工道具、条件が許せば旋盤に関する道具や木彫りに関する道具、さらに可能であるならば鍛冶に関する道具を使用する技能(händighet)や能力(förmåga)を獲得させることを目的としている。とりわけ農村部の学校では、農民にとって必要なもの(föremål)が製作される。」「スロイドの教育は国民学校の高学年(folkskolans högre avdelningar)において、また補習学校(fortsättningsskolan)において教えられる」「知識の学習とスロイドの学習は適切な方法で相互に交代するように実施される。例えば固定型国民学校では午前中の4時間は知識の学習に、午後の2時間はスロイドにあてるような方法で、またはある日は知識の学習に、別の日はスロイド(の学習)にあてるような方法によって行われる。」(Folkskolestadgan med flera författningar rörande folkundervisningen. Tilledning för skolråden, s.37-s.38, 1880)

また、この法令では、この国庫補助金を国民学校に提供するだけではなく、「学齢にある子どもに別の仕方(スロイド教育を)組織した教区(församlingar)」にも提供することを掲げていた。このこと

により、すでに設立されたスロイド学校へもこの国庫補助金が提供されることになった。ここには、この法令に先立つ国会(Riksdag)での議論を受けてなされた妥協が法令の内容に反映していると考えられる。しかし、国会での議論を含めてこの法令の成立過程については別の機会に論じることしたい。

(2) スロイド学校と国民学校との統合など

—— オットー・サロモンの『スロイド学校と国民学校 第2巻』にみられるスロイド学校改革の若干の論点 ——

オットー・サロモンの『スロイド学校と国民学校 第2巻』(Slöjdskolan och Folkskolan II)は、1876年にスウェーデンの南西部にあって、スロイド学校が一番多く設立された県であるエルフスボリ県のヘムスロイド協会が「スロイド学校と国民学校の統合はいかに可能か」という懸賞論文を公募し、それに提出された10本の論文のうち数編をサロモンが選び、さらにこの問題に関連する資料を掲載して1878年12月に編集・発行したものである。1877年9月に国会での決議にもとづいて、法令が公布され、男子に対するスロイド教育を実施する国民学校やスロイド学校に補助金が出されることになり、国民学校におけるスロイド教育の導入問題がさまざまに議論されるようになった。この著作の序文において、サロモンは「スロイド学校と国民学校の統合問題は、まだ実験レベルであり、今後経験を積み重ねていくなかで、現在出されている疑問にも答えていくことができる」と書いている。この著作は、この問題に対する議論と実践を進めていくために出版されたと考えられる。

この著作には、以下に掲げる7つの論文と最後に12校のスロイド学校の概要が収録されている。()内は執筆者名)

1. 国民学校におけるハンドスロイド (Claes Bratt)
2. スロイド学校は国民学校と統合可能か? (M. Ysenius)
3. スロイド学校は国民学校と統合可能か? (K. Börjesson)
4. ゴーロン教育施設* におけるヒュースフリート問題 (C. J. Lundbäck)
5. スロイド問題に関する検討 (Cdr g)
6. エルフスボリ県の国民学校教師とスロイド教育 (Otto Salomon)
7. 1877年4月11日の国会第2院における国民学校教師養成所の拡張に関する県知事エリック・ス

パレの発言

これらの論文において議論されている内容は多岐にわたるが、スロイド学校改革にかかわる最大の論点は、スロイド学校を国民学校と統合させることにあった。そのことと関連して、スロイドの教育を担当する教師の問題（国民学校教師が担当するのかそれとも職人が担当するのか）や、新教科の教育課程上の位置づけの問題（必修教科とするのか、選択教科とするのか〔正規の時間割（schema）外に位置づけるのか〕）が議論されている。

(3) 1877年改革によるスロイド学校変容の萌芽の実態

先の著作の最後に「男子のためのスロイドが教えられている学校は現在106校に達した」として**、12校の概要を紹介しているが、その中の一つである「子どもと若者のための実践的労働学校（Praktisk Arbetsskola för Barn och Ungdom）」については、サロモン自身が「この教育施設は、富裕層の子どもたちを対象としているので、この冊子で扱ってきたスロイド学校と決して混同されるべきではない」と述べているように、他のスロイド学校とは同列に扱えないので、ここでは省略した***。以下にそれを除いた11校の概要を紹介する。以下に紹介するスロイド学校の概要に関する部分のなかの引用は、すべてOtto

* この教育施設は、両親のいない子どもや親が犯罪者であったり、きちんと養育されず、放置された子どものために1832年にストックホルムのソーデルマルム（Södermalm）にJohan Olov Wallinによって創設された。この施設には、犯罪をおかした子どもも収容された。1860年にストックホルムからゴロン（Gålön）に移動し、1940年代に廃止された。

** 1882年に発行されたOtto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan IV* (1882), には「スロイドを実習教科として教えている学校の数は」「1876; 80, 1877; 100, 1878; 120, 1879; 200, 1880; 300, そして現在のところはおよそ400以上の学校で男子のスロイドを実習教科として教えている」と述べている (ibid, s. 14-s. 15)。1878年以降の数字には、スロイドを教科として導入した国民学校の数字も含まれていると考えられる。

*** この学校は、パルムグレン（Karl Edvard Palmgren,）が1876年にストックホルムに創設した学校で、1880年代の初め頃にはとても有名な学校となり、さまざまな国から教育関係者が視察に訪れた。この学校については別稿にて検討する予定である。

Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan II* (1878) からのものである。

①ウプサラ・スロイド学校（*Uppsala slöjdskola*）
（ウプサラ県）（表-108）

ウプサラ県の知事であるハミルトン氏のイニシアチブにより、ウプサラにおいて労働学校（arbetskola）として30年以上前から活動してきたものが、1872年秋にかなり拡張されてスロイド学校となった。国民学校と統合されたこのスロイド学校は、ウプサラ市によって経費が負担されているが、「それは国民学校の男子生徒を受け入れているから」である。授業については、その一部を校長が担当し、あとは（年間）給与で雇用されている教師と臨時雇用の教師によって担当されている。校長は、「材料の購入、作業内容の決定、販売、作業による収益に対する生徒の分け前の決定、収入と支出に関する会計報告を遂行する責任」を持っている。その学校への入学条件は、「国民学校の最初の3年間を修了していること」である。生徒は第4学年に入ってはじめて手工（handslöjd）に取り組み始める。第4学年と第5学年の生徒が週にそれぞれ15時間、国民学校と労働学校に交代で通学する。夏期休暇の間には、すべての学年の生徒たちが作業をすることができる。各生徒は、自分が製作したものに對して「作業時に示したその勤勉さと正確さにしたがって報奨金を受け取る」が、その製品の販売価格の半額を超えることはない。この作業による収入は、作業帳に記入され、各年度の終わりに貯蓄銀行に預金される。卒業試験（afgångsexamen）の後、学校を修了するときにその収入を貯蓄銀行から受け取る。1877年の冬学期に、この学校で教えられていた内容は、「木工、旋盤作業、糸のこ作業（löfsågning）（ただし、彫刻（träsnideri）と関連したもののみ）、かご編み細工、籐細工、ガラス細工（Glasmästeri）、靴の製作（Skomakeri）」であった。これらのスロイドの教育は、「同時に実施されるのではなく、異なる時間に交代で行われる。一度に4種類以上のもが行われることはなく、生徒が約40人以上になることはない」。授業は、一日に6時間（午前9時から12時、午後2時から5時）で、各生徒には3時間ずつ割り当てられる。

この国民学校にスロイド教育を導入したもっとも特筆すべき成果は、1）親が自分の子どもを国民学校により長い時間滞在させるようになったこと 2）生徒自身が学校での学習を続けることへの関心と嗜好を強めたこと 3）能力のない生徒が理論的教科においても、スロイド教育への参加を通して改善をしめすよ

うになったこと 4) 多くの怠け者が勤勉で、時間を大切にすることになったこと 5) スロイド教育は一般的に子どもの行動と秩序の改善に貢献したこと 6) 生徒は労働学校から成績証明を受けた後、概してよい仕事を得ることができたこと」にあった。

スロイド担当の教師の給与は年額800クローネで、それに賃貸料無料の住居が提供される。さらに、彼の指導によって製作された作品の販売価格の10%が提供される。作業室は、国民学校とつながっており、3つの特別な部屋からなる。製作された作品は、その場で売られるか、農業経済会議所のスロイド販売店で販売される。

② クラーストルプ・スロイド学校 (Claestorps Slöjdskola) (ソーデルマンランド県) (表-①⑨)

この学校は、スロイド教育の普及のために熱心に活動したクラス・レヴェンハウプト伯爵によって1872年に設置され、今日まで維持されてきた。授業は、3つの教室で行われている。生徒の年齢は7歳から15歳で、人数は30人から50人である。生徒によってきちんとされた仕事に対する報酬は、毎週土曜日に支払われる。学校の目的は、「技能的な面で職業人を養成することではなく、生徒が手の労働 (handarbete) を愛し、自分の暇な時間を有用に使うことを可能にすること」にある。

③ ヴィースビ・スロイド学校 (Wisby Slöjdskola) (ゴットランド県) (表-①⑩)

「管理委員会によってなされた準備とエルヴスボリ県のフェリエラング教区のスロイド教師であるグスタフ・ダーリンが当分の間その学校の校長になり、またスロイドも担当すること、及び中等学校助教諭ヨハン・カール博士が時給で製図の授業を担当するという契約、D. B. W 協会の建物を無償で借用するという規定にしたがって」、その学校が1876年4月に開校された。その後すぐに、管理委員会は学校の執行部を任命し、執行部はその年度の終わりまでに重要事項を処理した。執行部は「執行部の任務、学校組織の規則に関する提案を報告し、その提案は協会によって7月3日に承認された」。

学校の規則によれば、その学校には男女とも、年少年長ともに入學できるが、一般的に12歳以下では入學できない。スロイド教育は、毎日午前と午後に行われる。製図の授業は午後で週に4回行われ、1回あたり2時間である。さらに日曜の午後にもあるが、その授業は在職者が対象である。学校が最初に開校したとき

には、200人の生徒が殺到したが、選別と自主的な退学の後、定期的に通学している生徒は主に都市の国民学校の上級クラス (övre klasser) から来ており、50人を超えている。彼らは「各人が午後2回スロイドの授業を、午後1回か2回製図の授業を」受けている。彼ら以外にも、「古典語学校 (elementarläroverket)* や女学校 (flickskola)** の生徒やその他に成人も」スロイドの授業を受けている。

国から派遣されたスロイド・インストラクターであるエンジニアのラムストロームによって作成され、管理委員会によって承認された計画を執行部はたえず実施してきた。この計画によれば、学校の主要な任務は「生徒たちに器用さ (händighet) や嗜好 (smak) や几帳面さ (ordentlighet) を育てることであるが、特別の職業のために彼らを教育することではない。最も望ましいことは、初心者には、嗜好を磨き、観察力を鋭くし、同時に最も普通にある道具の扱い方の練習をおこなうこと」である。その際、最初の科目としては、「木工、旋盤作業、木の切断と鋸引きおよび製図」が

* 古典語学校 (Elementarläroverk) は、1847年に計算学校 (Apologistskola) と学問学校 (lärdomsskola) とが統合されたときにその総称として使用された用語であった (Ulf P Lundgren (red), "Pedagogisk Uppslagsbok", Stockholm, Lärarförbundets Förlag, 1996)。Elementarläroverk と Läroverk とは基本的に同義で、ともに古典語学校と訳した。松崎巖は Läroverk を学問の学校と訳しているが (『世界教育史大系25 北欧教育史』講談社、), 学問学校 (lärdomsskola) との違いがわかりにくいので、筆者は古典語学校と訳した。なお、19世紀を通して古典語学校は社会の変化とかかわって大きく揺さぶられた (Ulla Johansson & Christina Florin, "Där de härliga lagrarna gro-": kultur, klass och kön i det svenska läroverket 1850-1914, s. 81 - s.104, 1993参照)。

** 女学校 (Flickskola) は女子のための特別に理論的なことを学ぶ学校で、1786年に最初にイエーテボリにおいて開設された。その後、1831年にストックホルム (Wallinska skolan i Stockholm) に開設され、1868年にはストックホルムに高等女子教員養成所 (Högre lärarinna seminariet (HLS)) が創設されたが、それも女学校の一つの形態とされた。1928年までは、女学校はすべて私立の学校であった (Ulf P Lundgren (red), "Pedagogisk Uppslagsbok", Stockholm, Lärarförbundets Förlag, 1996)。

選ばれた。

執行部は「場合によっては特殊な職業的技能を教えることを試みるべきであると考えた」が、「そのことは住民の中ではあまり重視されていなかった」。それゆえ、執行部は「かご編みの基礎的な知識を習得する機会を与えると同時に暇な時間に家庭でそれに関する仕事に従事するように、巡回のかご編みインストラクターを派遣した」。一般の人々や特に職業人がこの教育を活用することが奨励された。「かご編みの教師は6週間雇用され、その間に学校の普通の生徒たちが授業を受け、生徒の技能はよくなった。しかし、当初期待された職業人や農民の参加は実現しなかった」。

エンジニアのラムストローム氏は、管理委員会の要請を受け、1876年6月にその学校を訪問し、そこで執行部に対して授業の進行状況や道具一式に満足を表明した。

学校は、3ヶ月間だけ活動していた状況であったが、県の農業会議での展示で、審判員によって農業経済会議所による銀メダルが授与された。また、ノルショーピン市で開催されたスウェーデン全国農業会議において生徒の作品が展示され、国の多くのスロイド学校との競争において、銅メダルを獲得した。

学校の設備は、製図室に14台の製図用机と1台の整理用机、スロイド室に5台の匏台、2台の旋盤、6台の切断台、1台の足踏み鋸と、それらに付随した道具一式からなる。これに加えて、二つの部屋には棚がおかれている。そこには、モデルと見本が設置され、その一部は、以前に農業経済会議所により購入されたものである。

学校の規則によれば、生徒が製作したものは校長により、優、可、不可のいずれかに判定される。優と判定されたものは、モデルのリストに書かれた販売価格で販売される。可と判定されたものは、その3分の2の値段となる。生徒は、その販売価格の半分を受け取る。この販売による学校の収入は、125クローネ3オーレとなったが、使用された材料の費用はその倍以上であった。

④ シンメルスリョード・少年スロイド学校 (*Simmerslöds slöjdskola för gossar*) (イエーテポリ・ボヒュース県) (表-④)

このスロイド学校は、「1859年に作成された遺書により、高等裁判所弁務官ベルギウス (S. Bergius) が自分の全財産を子ども (少年) の家 (寄宿舎) (Barnhus (internat) för gossar) に寄付したことをうけて」、1874年末に開始された。「実際的な生活

に必要で有用な知識を少年に教えることを試みようとする施設におけるスロイド教育の有用性と必要性については疑問の余地がなかった」。最初は一日6時間、午前中に4時間、午後2時間理論的教科を学習した。経験によって明らかになったことは、「午後からの学習はあまり成果が伴わず、スロイドを導入することを考え、以前の6時間の理論的教科の学習は、午前中のみ実施するように計画した。この計画は校長の支持を得たが、予算の関係で特別にスロイド教師を雇用するには至らなかった。この計画を立てる経過において、計画者は「1. 自分が子どもの頃にスロイドを学んだことから受けた実感 2. 計画者が訪問した3つのスロイド学校から学んだこと 3. 計画者がアールボーンとの手紙のやりとりによって、助言と情報を得たこと」を参考にして1874年に計画を実行した。午前中だけの授業が導入された後に、男子生徒たちはより勤勉さを示した。また、製図の授業は午後に行われた。春の初めから、夏、秋まで、男子は午後の大部分を庭園のさまざまな仕事に従事した。そのときに少数のものだけがスロイドに従事した。

スロイドの導入によって、「職業的な技能を養成することが目的でなく、手と眼の練習を与え、かつ労働への尊敬 (aktning för arbetet) を育てること」にスロイドの授業の目的があることが明確になった。スロイド学校発足以来、1876年の秋までには生徒数は15人であったが、さらに2名加わって17人となった。その17人がスロイドの授業に参加した。さらにその施設に属さない3人の少年たちが、定期的にスロイドの授業に参加していた。

スロイドでは、「台所と家庭のための小物、大小のイス (いわゆる折り畳みイス)、ハンガー、道具の柄、ブラシ、スリッパ、靴脱ぎ、糸巻き、鍵箱、葉箱、花瓶のケース、花瓶に使う棒、本棚、本立て、机 (庭用、花用の台)、園芸用のイス、長イス、ほうき、人形用ベット、小さい手押し車、タオルかけ、トランク、そり、ステッキ、服掛け、メジャー、鍵用のラベル、ペンの柄、ペーパーナイフ、ねずみ取り、熊手の歯の部分、鏡の枠、写真たて等」を製作した。それらは、個人的に販売され、ある場合は試験の際に販売された。製作した生徒は、その売上金の半分を受け取り、他の半分は材料と道具の購入に使用された。男子生徒がそのようにして得た金は、貯蓄銀行に入金された。生徒は一人ずつスロイドの部屋にある道具の管理と保守をおこなう。「何か紛失した場合、生徒は不注意で物を壊した場合に各人が弁償せねばならないのと同様に、それを弁償せねばならない」。農家にある小さなもの

やその修理は生徒たちが行う。また、施設の生徒たちは服の修理や靴下の繕いも学んでいた。

⑤ヘリッダ・スロイド学校 (*Härreda Slöjdskola*)
(イエーテボリ・ボヒュース県) (表に記載なし)

この学校では、1874年から男子用スロイドと女子用スロイドが教えられてきた。男子スロイド学校には、「県の農業経済会議所が300クローネを補助し、それは道具の購入に使用された。そのうえにこの団体は、年間を通して教師や女性教師への報奨金、最も勤勉であった生徒や高いスロイド技能をもつ生徒への報奨金を授与することに補助金を出してきた」。授業は、男子に対しては国民学校教員によって、女子に対してはその教員の妻によって担当される。スロイド教育の時間は、現在(1877年夏)では木曜日の午後と土曜日の午前に限定され、およそ約38週間継続される。「本来の国民学校への通学は、3、4年、最高で5年までであり、この期間にスロイドの教育は男女共に義務づけられている」。「生徒が学校に対して道具と材料の経費を支払う必要はなく、教師は無給で働くが、製作したものの売上金があれば、その一部を生徒は得ることになる」。スロイドで作ったものの販売は良好で、住民がこのことに関心を持っていることを示している。

女子は「編み物、服縫い、名前つけ、クローセ編み等」を学ぶ。男子は「木工と旋盤作業を学び、簡単な木の机、踏み台、折りたたみ式ベッド、ハンガー、スリッパ、まぐわ、角燈、手押し車、道具の柄等」をつくる。

生徒たちはスロイドを「とても楽しみ、好感をもっている。何人かの生徒は良い資質を示す。その例として、彼らは休み時間を自主的にスロイドに利用する。生徒は二つのグループに分けられ、隔日のみ通学するものの、以前の全時間が理論的教科の学習であった時と同じくらい多くを学んでいる」。

この学校の目的は、「職業人を養成することではなく、有用な仕事に生徒を慣れさせ、最も普通にある道具や家財用品を修理したり作ったりすることの有益性を彼らに学習させること」にある。

⑥オースタッド子どもの家附設スロイド学校 (*Östad barnhus slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-52)

この子どもの家においては、スロイド教育が1876年5月初めに開始された。その施設の子どもの家は週5日子どもの家での授業に出席することが課されているが、4日は国民学校の教科の学習に取り組み、1日がスロイドの学習に取り組み。国民学校の教科の学習は1日

6時間で、午前7時30分に開始し、午後1時30分に終了する。それに対して、スロイドの学習は、一日中続けられる。「一般的に子どもたちはとてもスロイドに興味を抱いている。なぜならスロイドの学習の日には、子どもたちが早くから全員あつまっているからである」。スロイドを学んでいる男子は、昨年度は22人であった。女子は男子と大体同じ数で、裁縫を学んでいる。子どもの年齢は、12歳から15歳であった。男子のスロイドを担当したのは大工職人であり、女子の裁縫を担当したのは女性教師である。規律の維持のため、さらには製図とスロイドを平行して教えるために国民学校の教師も男子のスロイドの授業に参加し、生徒は数人ずつ順番に製図を学習している。

スロイドの活動は、「特に農業に必要なものを作ることを含んでいる。その理由は、生徒は一般的に農業労働者になるからである」。「生徒を励ますために、彼らは自分で製作したものを自宅に持ち帰ることができた」。

スロイドの授業は生徒に大いに役立つが、それ以外にも、その活動は「教区内の民衆一般にスロイドへの関心を喚起し、活気づけるように思われる」。

⑦エーケルード・スロイド学校 (*Eckeruds Slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-53)

ダールスランド地方は、「スロイドの救済が一番必要な地域」である。この目的のためにエーケルードにスロイド学校が設置された。学校は、1875年3月1日に活動を開始し、その後、夏期を除いてその活動を継続してきた。エルフスボリ県の北部スロイド協会は、1000クローネを建物の建築費への補助金として援助し、学校の活動への年間の補助金として500(1875年)、1000(1876年)、1200(1877年)クローネを補助した。

スロイドの授業の目的は「最も普通にある農業道具を製作する技能を教えること」であり、この授業は校長ヤコブソン(A. G. Jacobsson)氏と一人の補助教師が担当している。生徒の数は、今学期は24人で、年齢は12歳から22歳までであった。学校は、午前6時から午後7時まで開かれ、「鋤やまぐわ、ふるい、草刈り機、はかり、機織り機、ベッド、長イス、机、イス、洗面台、鏡、本棚等」がつくられた。製造されたものは、その地域で販売された。

⑧ファルショーピング・スロイド学校 (*Falköpings Slöjdskola*) (表に記載なし)

この学校は、1876年10月15日にその活動を開始し、年間8ヶ月活動することになっている。一日の作業時

間は6時間、すなわち午前9時から午後1時、午後3時から午後5時である。生徒数は1877年度の春学期には46人で、作業時間を以下のように区分している。

「国民学校の男子生徒は午前9時から午前11時まで
学校に通っていない子どもは、午前11時から午後1時まで

教師の子どもは、午後3時から午後5時まで」

国民学校の男子生徒は、2つのグループに分けられ（それぞれが7、8人の生徒からなる）、1日おきに学校に通う。午前11時から午後1時まで通う子どもは、最初は同じ方法で分けられたが、後に1つのグループになった。いま彼らは毎日通学している。彼らの年齢は全員15歳以上である。教師の子どもは、3つのグループに分けられ、それぞれが8人である。彼らは週に2回学校に通う。

これまでに、「木工、旋盤作業、かご編み細工、針金細工、彫刻、糸のこ作業（主に年少の生徒を対象に）、亜鉛板細工、製図（線図およびフリーハンド）」が取り組まれた。生徒は、自分たちが製作したものの販売代金の25%を受け取る。

⑨ヨーテッド・スロイド学校 (*Hjorteds Slöjdskola*) (カルマル県) (表-30)

ヨーテッド・スロイド学校は、最初は聾唖児童施設の生徒たちにスロイド教育を提供することを目的として創設された。その後国民学校の生徒も対象になっており、現在では主に国民学校の生徒がその場所を使用している。このスロイド学校は、1873年8月に開始され、年に4か月間活動をしている。作業室は狭小で、8人から10人以上の生徒を同時に収容できない。「木工、旋盤作業、木の切断、ブラシ製造等を担当する教師は、その4ヶ月の期間に1日につき2～2.5クローネの日給を受けとる。かご編み細工を担当する教師は、時給25オーレを受けとる。わら細工は主に聾唖児童(女子)向けのものである」。

子どもの関心を活気づけるために報奨が与えられるが、お金ではなく、よい道具が授与される。教師は到達した技能よりも、示された勤勉さと意欲をできるだけ励まそうとしている。製作したものはオークションで販売され、その後製作した生徒が販売総額の半額を現金で受け取る。他の半額は、貯蓄銀行に預けられる。農業経済会議所の年間の補助金は250クローネであったが、今年から350クローネに引き上げられ、いくつかの教科の非常勤教師を雇う義務を伴うことになった。北部カルマル県のスロイド学校の主な原則として、スロイド学校の目的は「生徒を手工職人 (handt-

verkare) にするのではなく、農業を捨てることでもなく、労働の喜び (lust för arbete) とできるだけ多くの単純な道具を取り扱う技能 (skicklighet) を教え、大抵の場合自助できるように、また他の仕事が無くなった場合副業の手段にもなるようにすること」である。

⑩アルボーガ・スロイド学校 (*Arboga Slöjdskola*) (ヴェストマンランド県) (表-11)

この学習施設は、市長をはじめとする人々の準備をふまえて、1876年4月1日に開始された。最初学校は屋根裏部屋におかれたが、後にスロイド学校のために借用された2つの部屋におかれた。その部屋の賃貸料は年220クローネである。道具や設備一式の費用は800クローネで、モデルの費用は3つのモデルで400クローネである。教師の給与は、年額600クローネである。夏学期には授業時間は週48時間、また冬学期には週46時間となる。生徒の数は26人であり、その中の8人は、12歳～15歳であり、残りの18人は10歳～12歳である。年長の生徒は「園芸用のイスや机や長イス、年少の生徒は楊枝、鳥かご、花用の棒、ラベル等」を製作している。

⑪エッペルブー・スロイド学校 (*Äppelbo Slöjdskola*) (コッパルベリ県) (表-75)

「国民学校と連携して成立したこのスロイド学校」は、学校教師のイニシアティブで、コミュニケーションが最初の年に350クローネの補助金を予算措置し、さらに毎年50クローネの補助金を4年間支出することを決定した後、1877年2月20日にその活動を開始した。「木工と靴製造のための道具が購入されたが、靴製造の方は生徒の興味を引かなかった」。

スロイド学校を開始するために、その学校教師は無償でスロイド教育を担当した。作業場としては、国民学校のホールの一部が利用された。スロイドの授業時間については、時間割に配当された一日2時間と昼休みの1時間、その日の放課後の1時間がスロイドにあてられたが、実際に生徒がより長い時間放課後に残ることもよくある。

スロイドの授業には一度に15人の男子生徒（その数は過大であると思われるが）が参加した。生徒は「イス、スプーン、ひしゃく、網、スリッパ、ねずみ取り、ブラシ、バターナイフ、クッキーをつくるための型等を製作し、旋盤作業（パン粉をこねる棒、道具の柄）も行った」。生徒たちは、製作したものの販売代金の中から原材料の購入費を控除した後の分を受け取る。

5. 若干の分析

以上の記述にみられる1870年代のスロイド学校の特徴をいくつかの視点からまとめておく。

(1) 学校が設置された地域

多くのスロイド学校は、すでに図1で示したように農村部に位置していた。しかも、かなり特定の地域に集中しており、とりわけスウェーデン南部に多かった。農村部に位置していたことは、スロイド学校の問題が農村部の貧困農家の子弟の教育の問題とかわっていたことを背景としていた。スウェーデン南部に多いのは、北部は森林地帯であり、人口がきわめて希薄であったことがその背景として考えられる。また、特定の地域に集中しているのは、各地域の農業経済会議所や地方議会などのスロイド教育問題に対する取り組みやその地域の指導者層のこの問題に対する関心の大きさの差によるものと考えられる。

(2) スロイド学校設立の契機

多くのスロイド学校は、国民学校と連携して（あるいは「統合され」組織されていた。これがこの時期に設立されたスロイド学校の大きな特徴である。事例Ⅱ-①のように*、すでに30年以上の歴史をもつスロイド学校であっても、1870年代に「国民学校と統合され」「拡張され」た。事例Ⅰ-⑭や事例Ⅱ-⑫のように、個人のイニシアチブによってスロイド学校が創設されたところもあったが、スロイド協会（とりわけエルフスボリ県では、スロイド協会が独自の補助金制度を発足させた（事例Ⅱ-⑦））ことや農業経済会議所や地方議会の補助金制度が学校設立の大きな契機になっていたところもあった。

(3) スロイド学校の目的

1870年代に創設されたほとんどのスロイド学校では、その目的を「農民を手工職人の分野に引き込むことでなく、農民をできるだけ手工職人に頼らないようにすること」（Ⅰ-⑩）、「技能的な面で職業人を養成することではなく、生徒が手の労働（handarbete）を愛し、自分の暇な時間を有用に使うことを可能にするこ

* 事例Ⅱ-①とは、サロモンの*Slöjdskolan och folkskolan II*に掲載された①の事例（ウプサラ・スロイド学校）のことをさしている。以下同様のこと。

** Bennettは「1876年までの時期のスロイド教育は経済的な必要のもとづくもので、本質的にホーム・スロイド（home sloyd）であった」としている（C. A. Bennett, *History of Manual and Industrial Education 1870-1917*, p.62-p.63, 1937）。

と」（Ⅱ-⑫）としていた。すなわちベネットがいうような“home sloyd”を教えること**、言い換えればホームスロイドを教えることにおかれているものはほとんどなく、「職業的な技能を養成することが目的でなく、手と眼の練習を与え、かつ労働への尊敬（aktning för arbetet）を育てること」（Ⅱ-④）「最も普通にある農業道具を製作する技能を教えること」（Ⅰ-⑦）など一般的な技能を教えることにおかれていたことが注目される。スロイド学校の目的を「労働技能または訓練された資質の育成」におく事例（Ⅰ-⑰）のような事例もあった。この学校では、国民学校をすでに修了した生徒を受け入れており、生徒の年齢も他の事例と比べても高かった。この学校はスウェーデン北部のウメオにある学校で、先に述べたことも考え合わせるとその地域の特性を反映した事例であり、例外といえるかも知れない。

(4) スロイド教育の教育内容、教材について

スロイド教育の教育内容や教材について、表4に示した。この表から木工作業が中心であり、すべてのスロイド学校で教えられていたことがわかる。いすなどの家具、家庭内で用いられる食事用の各種の道具だけでなく、農作業用品を含むきわめて多様な実用品が作られていた。道具や工具の使用法を教育内容としては掲げていないように思われるが、「旋盤作業」がこの表4において11事例あった。これら多様な作品から、ナイフを含む多様な工具が活用されていることを知り得るのみではなく、少なからぬ学校で木工旋盤が活用されていたことも注目される。

一部のスロイド学校で「鍛冶」（Ⅰ-⑨）「金属加工」（Ⅰ-⑯）「鉄に関する仕事」（Ⅰ-⑰）「針金細工」（Ⅱ-⑧）が教えられ、金属を加工する多様な品物が製作されていたことが注目される。そこには馬蹄のような農業に必須の用具のみではなく、パール、ハサミなどの金属加工用の工具の製作さえ含まれていた。

糸のこ作業に取り組んでいる事例が8つ（Ⅰ-⑤、Ⅰ-⑥、Ⅰ-⑫、Ⅰ-⑬、Ⅰ-⑮、Ⅰ-⑯、Ⅱ-①、Ⅱ-⑧）あったが、この当時（1870年代半ば）、糸のこ作業を教えることが流行していたことと関連していると考えられる*。事例Ⅰ-⑫から「糸のこ作業で製作されたものは、生徒にとって実践的に利用できるものではなく、さらに販売することも難しい」ので、次

* サロモンは、糸のこ作業が当時スウェーデンにおいて流行し始めていたと書いている（Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.13, 1891）。

表4 1870年代のスロイド学校の教育内容、教材（男子）

I-①	簡単な木工、木靴、ブラシ、鞆、木製スプーン、ひしゃく、織物用シャトル、大小の机、糸巻き、まな板、はかり、玩具、調味料用棚、桶、簡単な農業用具の製作とかご編み細工
I-②	旋盤作業、簡単な木製スプーンや丁寧に仕上げられた木製スプーン、道具の製作、桶板、ブラシ製造、わら細工、ハンダづけ、油塗り、窓ガラスをはめる作業等
I-③	単純なスロイド、馬鞍の製作、かご編み細工
I-④	最初の2年間は木工と靴の製造。その後木工だけとなる。主に鋸、斧、ナイフ、鉋、ドリル、ハンマーなどの道具の使用方を教えている。それらの道具はイスを製作するときに必要となるので、ほとんどの生徒はイス製作に従事。旋盤作業や彫刻も教えるが、それらは関心と才能を示した生徒のみに対して実施される。年少の生徒は、名札、編み物用の道具、ほうきなどを製作。その他に異なるモデル（台所用、庭園用、子ども用、休食用）にしたがってイスを製作。さらに小さなテーブル、糸巻き、ステッキ、ペーパーナイフ等の小さなものを製作
I-⑤	小さな家具の製作、彫刻、糸のこ作業
I-⑥	木工、旋盤作業、糸のこ作業。盆、箱、手桶、工具の柄、痰壺、いろいろな種類のモデルを製作。一部の生徒は糸のこ作業。
I-⑦	たらい、机、熊手、鋸立てのような生活用品、手押し車やスコップ
I-⑧	靴職人と仕立屋のもとでいたんだ靴や服を修理し、新しいものを作る。鍛冶では、単純な工具、例えばハンマー、はさみ、パール、馬蹄、木の実割り、砂糖はさみ、スパナ等をつくる。さらに、その他に注文によってさまざまなものをつくる。木工職人のもとで家具や台所用品をつくる。
I-⑩	おけ、足台、簡単な玩具の木彫り
I-⑪	簡単なイスや机、熊手、木製スコップ、まぐわなど、いわば日々の生活に必要なものをつくることを学ぶ
I-⑫	（最初は）糸のこ作業であった。この作業を通して製作されたものは、生徒にとって実践的に利用できるものではなく、さらに販売することも難しいので、これからはスロイドとして木工を導入することが現在検討されている。
I-⑬	製図、木工、糸のこ作業、旋盤作業。製作されたものは、大部分がその地域で販売される机やイス等の家具であった。また、注文によって家庭に必要な小物を製作した。
I-⑮	木工、糸のこ作業、彫刻
I-⑯	旋盤作業やより簡単な木工に従事し、糸巻き、台所と家事のためのさまざまな小物、ハンガー、瓶の栓、樽の栓、小箱、道具の柄、パンをこねるための道具、糸のこのフレーム、熊手、バター用スコップ、バター圧搾器等を製作。彫刻や糸のこ作業、ブラシ製造やわら細工、かご編み細工、いろいろな玩具、金属加工等。
I-⑰	麦わらマット、かご細工、ブラシ細工、鉄に関する仕事
II-①	木工、旋盤作業、糸のこ作業（ただし、彫刻と関連したもののみ）、かご編み細工、籐細工、ガラス細工、靴の製作
II-③	木工、旋盤作業、木の切断と鋸引きおよび製図、かご編み
II-④	台所と家庭のための小物、大小のイス（いわゆる折り畳みイス）、ハンガー、道具の柄、ブラシ、スリッパ、靴脱ぎ、糸巻き、鍵箱、薬箱、花瓶のケース、花瓶に使う棒、本棚、本立て、机（庭用、花用の台）、園芸用のイス、長イス、ほうき、人形用ベット、小さい手押し車、タオルかけ、トランク、そり、ステッキ、服掛け、メジャー、鍵用のラベル、ペンの柄、ペーパーナイフ、ねずみ取り、熊手の歯の部分、鏡の枠、写真立て等
II-⑤	木工と旋盤作業を学び、簡単な木の机、踏み台、折りたたみ式ベット、ハンガー、スリッパ、まぐわ、角燈、手押し車、道具の柄等
II-⑦	鋤やまぐわ、ふるい、草刈り機、はかり、機織り機、ベッド、長イス、机、イス、洗面台、鏡、本棚等
II-⑧	木工、旋盤作業、かご編み細工、針金細工、彫刻、糸のこ作業（主に年少の生徒を対象に）
II-⑨	木工、旋盤作業、木の切断、ブラシ製造等
II-⑩	年長の生徒は園芸用のイスや机や長イス、年少の生徒は楊枝、鳥かご、花用の棒、ラベル等
II-⑪	イス、スプーン、ひしゃく、網、スリッパ、ねずみ取り、ブラシ、ペーパーナイフ、クッキーをつくるための型等を製作し、旋盤作業（パン粉をこねる棒、道具の柄）

第に取り組みられなくなったことがわかる。

(5) 製図について

製図の授業をおこなっているスロイド学校は、ⅠとⅡをあわせて6校あったが、国民学校教師が製図を担当している事例(Ⅱ-⑥)や製図を専門としている教師が担当する事例(Ⅰ-⑧, Ⅱ-③)やスロイド教師が担当する事例(Ⅰ-⑬)があった。先述したようにサロモンはフリーハンドのスケッチ(frihandsteckning)よりも線図(linearritning)を重視していたが、このことが明記されている事例は1つだけであった(Ⅱ-⑧)。他の事例は「製図」(ritning)とだけ記述されているので、その内容は不明である。国民学校教師が製図を担当するという状況は、1860年代から国民学校に製図が徐々に導入されていった²⁹⁾こととかかわっていると思われるが、この点については今後の検討課題としたい。

(6) 学校の規模、設備

1870年代の多くのスロイド学校は、主にスロイドだけを教える作業室と施設・設備や材料、モデルや製作したものを保存する場所から構成される。ここで紹介した事例Ⅰ-⑭ネース・少女スロイド学校のように、あるいは別稿²⁹⁾で分析したネース・少年スロイド学校のように、スロイド学校で国民学校の普通教科目を教えているようなスロイド学校は例外的な存在で、大部分はスロイドの授業だけを行うための作業室を中心としたものであった。

しかし、学校の施設・設備について詳しく書かれている事例もあった。事例Ⅰ-⑥と事例Ⅱ-③である。事例Ⅰ-⑥(ランズクロナ・スロイド学校)では、「作業場には8つの旋盤と6つの鉋台があり、それらとその他に道具の購入に1,172クローネを必要とした」と書かれていた。この学校については、少女スロイド学校についても設備に関する記述があり、「2つの特別室」があり、「1つの部屋には裁縫台と長いす、もう一つの部屋には4台の機織り機、2台のひも編み機、24台の紡ぎ機、4台の糸まき機等」がおかれ、「すべての道具類に要した経費は944クローネであった」と書かれていた。事例Ⅱ-③(ヴィーสบィ・スロイド学校)では、「学校の設備は、製図室に14台の製図用機と1台の整理用機、スロイド室に5台の鉋台、2台の旋盤、6台の切断台、1台の足踏み鋸と、それらに付随した道具一式からなる。これに加えて、二つの部屋には棚がおかれている。そこには、モデルと見本が設置され、その一部は、以前に農業経済会議所により購入されたものである」と書かれていた。これらの2つの例は充実した設備をもった学校の事例であると考え

られる。さらに、設備について詳しく書かれていないが、スロイド教育の内容として旋盤作業を位置づけている学校(Ⅰ-②, Ⅰ-④, Ⅰ-⑥, Ⅰ-⑬, Ⅰ-⑭, Ⅰ-⑰, Ⅱ-①, Ⅱ-③, Ⅱ-⑤, Ⅱ-⑧, Ⅱ-⑨)には、少なくとも木工旋盤は置かれていたことが読みとれる。

(7) 授業日

授業日については、隔日でスロイド学校と国民学校に通う事例(Ⅰ-④, Ⅱ-①)、週に1日の事例(Ⅰ-③, Ⅰ-⑩, Ⅰ-⑪)、あるいは週に2日、水曜日と土曜日の午後にスロイドの授業をおこなう事例(Ⅰ-⑤, Ⅰ-⑮)、毎日午後にスロイド教育をおこなう事例(Ⅰ-⑥)、冬季のみに授業をおこなう事例(Ⅰ-②)等、多様な授業時間が設定されていた。これは、国民学校が巡回型など多様な組織のあり方をもっており、スロイドの授業も多様な方法で組織されていたことを示している。

(8) 生徒の年齢について

生徒の年齢は、7歳~15歳(Ⅰ-①)、11歳~14歳(Ⅰ-④)、10歳~12歳(Ⅰ-⑤)、12~14歳(Ⅰ-⑦)、10歳~17歳(Ⅰ-⑩)、10歳~15歳(Ⅰ-⑪, Ⅱ-⑩)、11歳~14歳(Ⅰ-⑫)、10歳~19歳(Ⅰ-⑬)、12歳~15歳(Ⅰ-⑭, Ⅱ-⑥)、15歳~31歳(Ⅰ-⑰)、7歳~15歳(Ⅱ-②)、12歳~22歳(Ⅱ-⑦)ときわめて多様であった。この背景には先に述べたように1882年に学齢が7歳から14歳とされる以前は国民学校の生徒の入学年齢が多様であったので、スロイド学校の生徒の年齢も多様であった事情もあげられる。しかし、それだけにはつきない地域、施設ごとの多様性があったことも示されている。また一部のスロイド学校では成人さえも学んでいた。

(9) スロイド担当の教師について

職人がスロイドを担当する事例(Ⅰ-⑨, Ⅰ-⑩)と国民学校教師がスロイドを担当する事例(Ⅰ-⑮)があったが、多くの場合は、前者であった。それは、「国民学校の教師がスロイドの教育を担当することの能力不足とその意思がない」(事例Ⅰ-⑰)という問題状況を反映していたと考えられる。サロモンは、この問題を解決するために1874年からスロイド教員養成所を開始したが、1878年には国民学校教員を対象としたスロイド教授法の原理と方法を教える短期講習会に重点をおくようになった。1870年代のスロイド学校の校長やスロイド担当教員には、先のスロイド教員養成所を修了した人がいたが、1870年代のスロイド学校の発展にも貢献したと考えられる。

(10) 校長、教員とその待遇について

ほとんどのスロイド学校には、校長が専任教員として配置されていた。さらに臨時のスロイド教員がおかれる事例も多く存在した。校長やスロイド教員の給与等の待遇については、学校（あるいは地域）によって、性によって異なっていた（女子スロイド学校のスロイド教師の給料は男性教員の半額くらいに処遇されていた）。もちろん、スロイド教師の勤務すべき日数にもよるが、国民学校教師と同じ日数の場合はほぼ同額の給料を受け取っていた事例があった（Ⅰ-⑥）。教員養成機関において修了試験を合格した国民学校教師（すべて男性であった）の年額の給料は、1870年代においては500～600クローナ＋賃貸料無料の宿舍、畑地であった²⁹。この給料と比較して、スロイド学校教員の給料が低い事例もあった（Ⅰ-①）。逆に事例Ⅱ-①のウプサラ・スロイド学校のように、国民学校教員よりも高額である場合もあった（年額800クローネの給料）。職人がスロイド教師となる場合には、地域の相場が考慮された事例（Ⅰ-③）もあった。

(11) 製作した作品の扱いについて

生徒が製作したものはオークションや展覧会において、あるいは個人的にも販売され、多くの場合その売上金の一部は報奨金として生徒に支払われた。「販売総額の半額を生徒が現金で受け取り、他の半額は貯蓄銀行に預けられる」事例（Ⅱ-⑨）、「販売総額の半額を超えることはない」事例（Ⅱ-①、Ⅱ-④）、販売代金から「道具のメンテナンスに必要な経費や材料の購入」代金を差し引いた額を報奨金として生徒が受け取る事例（Ⅰ-⑥）、販売価格が「ほとんど材料代と同じくらいに」低く設定されている事例（Ⅰ-⑨）、材料代にも達しない事例（Ⅱ-③）などその支払い方法は多様であった。

また、その報奨金は貯蓄銀行に預金される場合が多かった（「各年度の終わりに銀行預金され」、「生徒が修了するときに受け取る」事例（Ⅱ-①）など）。「毎週土曜日に（報酬として）支払われる」事例（Ⅱ-②）もあった。

(12) 授業料について

授業料についての記述がある事例は、Ⅰ-⑩（シェーリングスホルム・スロイド学校）の事例だけで、「男子生徒の授業料は無料であり、学校にある道具を使用することができ、最初は自分の製作するものの材料も無料である。女子生徒も同様に授業料は無料であり、貧困な家庭の出身者は裁縫の材料費も無料となる」と書かれている。他の事例には授業料に関する記述はないが、スロイド学校が対象とする子どもは貧困農家の

子どもたちが主体であったことから、多くのスロイド学校の授業料は無料であったと考えられる。

以上に、サロモンの*Slöjdskolan och folkskolan I* (1876), *Slöjdskolan och folkskolan II*, (1878) において紹介されたスロイド学校に関する記述をくわしく紹介し、その特徴をいくつかの視点から分析した。このようにやくわしく紹介してきたのは、先に述べたように先行研究において1870年代のスロイド学校に関する記述がみられないからでもあるが、サロモンの2つの著作に書かれたスロイド学校に関する記述が当時のスロイド学校の実態をある程度反映しており、その詳細な記述そのものを紹介することに独自の価値があると判断したからである。

6. 結びにかえて

本稿では、オットー・サロモンの二つの著作に映し出された19世紀スウェーデンにおけるスロイド教育の状況を素描してみた。そこには、1870年代初頭までは停滞していたスロイド教育が1877年改革を契機として1870年代後半以降に変化、発展し始める状況が具体的な学校の実態に即して映し出されていた。ところでサロモンの筆致は、スロイド教育の状況とその変化の背景となっていたその経済的土台、すなわち当時のスウェーデン社会の状況と、19世紀後半に始まるその顕著な変化には及んでいない。つまり、スロイド教育の変化と発展の過程をどう解釈できるかについては全く触れていなかった。

そこでここでは、稿をしめくくるにあたり、停滞していたスロイド教育が1877年改革を契機として1870年代後半以降に変化し発展し始めた状況の背景に関する筆者のメモを整理しておく。

19世紀前半のスウェーデンにおける農村の窮乏化の進展と、19世紀後半とくに1870年代に始まる急激な工業化の進展とその中で発生した経済恐慌はスウェーデンにおける資本主義社会の到来を示唆するものであった。表2の数値は、全国人口の変化を示す統計を含んでいないし、したがって全人口に対する在学者の比率などの数値を示していないので、経済状態などを直接に反映するものではない。しかし、この表に見られる1870年代における民衆学校拡張の背景に工業化の進展という事情が反映していたことを読みとることは可能であろう。また、1879年に発生した軍隊が出動するほどの大規模な労働者の争議*は、スウェーデンにおける階級としての労働者すなわちプロレタリアートの誕生を示唆する事象として注目される。こうした急激な

工業化の進展は、筆者の理解では、イギリスにおいて18世紀に発生し19世紀初頭に及んだいわゆる古典的産業革命に比すべきものであった。その意味で、サロモンが明言しているわけではないが、1877年改革自体はスウェーデン社会の工業化へ向けた改革であったことが注目されるべきであろう。なお、スウェーデンの経済史研究者は産業革命と言わずに産業化(industrialisering)と称している場合が多いように見えるが**、この点についての立ち入った検討は別の機会に譲りたい。

1870年代後半におけるスロイド学校の叢生という事象が直接には1877年の法令により促進されていたことを疑う余地はない。しかしまたその背景ないし土台としてスロイド学校の叢生を可能ならしめた条件は、社会における工業化の進展であったとみるべきであろう。つけ加えれば、こうして生まれたスロイド学校の条件整備の進展、木工中心であったことは疑いないことであるにもかかわらず、金属加工の内容にまで及んでいたスロイド学校の教育内容の豊かさも、単にスウェーデンでは早くから鉄が普及していたので自らのほど(火床)をもつ農家が多かったとか、農村の至る所に鍛冶屋が存在したという状況の反映ばかりではなく、テンポは緩慢であったとしても農村をも次第に巻き込み始めていた工業化の進展の反映であったとみることができるのではないか。こうしてスロイド学校を拡充発展せしめた条件は、それを立証することは筆者の今後の課題であるが、後にオットー・サロモンの天才的努力とあいまって創造された教育的スロイドのモデル・シリーズの成立として結実することになるといえよう。

(注)

1) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s. 425-426, 1942

* 約6000人の労働者がデモに参加した争議であった(Isidor Kjellberg, *Sågverksarbetarne i Norrland*, 1879, Nytryck 1974 med förord av Barbro Björk, förord s. 3, Sundsvalls museum)。百瀬宏・熊野聡・村井誠人編『北欧史』(1998年, 山川出版社)では、約7000人と書かれている(p.260)。

** *En modern svensk ekonomisk historia — Tillväxt och omvandling under två sekel —* (SNS Förlag, 2000)では、1790年から1850年の時期を「農業の変化と初期の産業化(Jordbruksomvandling och tidig industrialisering)」と特徴づけている。

- 2) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s. 426, 1942
- 3) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan IV s. 14*, 1882
- 4) 拙稿「オットー・サロモンの初期スロイド教育——ネース・少年スロイド学校における実践の到達点からみたシグネウスの影響——」日本産業教育学会『産業教育学研究』第36巻第1号, p.73-p.80, 2006年1月
- 5) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I (1876)*, *Slöjdskolan och folkskolan II*, (1878)
- 6) *Folkskolestadgan med flera författningar rörande folkundervisningen. Tillledning för skolråden*, s.2, 1880
- 7) *Elever i obligatoriska skolor 1847-1962*" (Statistiska centralbyrån), s.20, 1974
- 8) Mats Sjöberg, *Att säkra framtidens skördar — Barndom, skola och arbete I agrar miljö: Bolstad pastorat 1860-1930*, Linköping universitet, 1996
- 9) *Elever i obligatoriska skolor 1847-1962*" (Statistiska centralbyrån), s.55, 1974
- 10) *Elever i obligatoriska skolor 1847-1962*" (Statistiska centralbyrån), s.52, 1974
- 11) *Elever i obligatoriska skolor 1847-1962*" (Statistiska centralbyrån), s.20, 1974
- 12) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.134, 1942
- 13) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.134, 1942
- 14) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.134, 1942
- 15) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.134, 1942
- 16) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.135, 1942
- 17) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.152, 1942
- 18) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.155, 1942
- 19) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.156, 1942
- 20) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.157, 1942
- 21) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan*

- I, s.82 (1876)
- 22) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, s.12-s.13 (1876)
- 23) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, s.14-s.19 (1876)
- 24) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, s.19-s.23 (1876)
- 25) 拙稿「オットー・サロモンの初期スロイド教育——ネース・少年スロイド学校における実践の到達点からみたシグネウスの影響——」日本産業教育学会『産業教育学研究』第36巻第1号, p.73-p.80, 2006年1月
- 26) 同上
- 27) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.418 - s.419, 1942
- 28) 拙稿「オットー・サロモンの初期スロイド教育——ネース・少年スロイド学校における実践の到達点からみたシグネウスの影響——」日本産業教育学会『産業教育学研究』第36巻第1号, p.73-p.80, 2006年1月
- 29) *Folkskolestadgan med flera författningar rörande folkundervisningen. Tillledning för skolråden*, s.4-s. 7, 1880
- （謝辞）スロイド学校の所在地の地図の作成，資料の収集にあたっては，Ingemar Ottosson氏（Kristianstad university）とHans Thorbjörnsson氏にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

A Study on the Sloyd schools founded in 1870's Sweden

Etsuo YOKOYAMA *

The purpose of this paper is to investigate Sloyd schools in the 1870s and analyze their particular characteristics. There was no statistical research work done about such schools at the time and because some Sloyd schools were experiencing unstatable situations, the number of the Sloyd schools operating at that time was not well known.

Although Albert Wiberg detailed the pedagogical idea behind of Sloyd education and its development from the 1700s to 1861, Wiberg did not describe in great detail the actual conditions of Sloyd schools in the 1870's.

Detailed reference to the national situation of the Sloyd schools in the 1870s can be found in *Slöjdskolan och folkskolan I, Slöjdskolan och folkskolan II*, booklets published by Otto Salomon in 1876 and 1878. I introduced the actual situations of Sloyd schools according to these references and analyzed them in this paper.

The following facts were founded:

1. Most Sloyd schools were situated in agricultural districts. They were concentrated in particular areas, especially in Southern Sweden. This suggests that the problems of Sloyd schools were related to the education for children of poor farm families in the agricultural districts as well as the program for the promotion of Sloyd in farmers' cooperatives or local assemblies.
2. A special feature of the Sloyd schools founded in 1870's was that most of them were founded by related with folk schools, or integrated into folk schools.
3. It is remarkable that the purpose of most of Sloyd schools founded in the 1870s was not to train the craftsman and teach home Sloyd, but to provide general skills (give pupils practice with their own hands and eyes and ability to use ordinary tools), and to develop a respect for working.
4. Most of the Sloyd schools founded in the 1870s were composed of ①workshops mainly for teaching only Sloyd, ②teacher, ③equipments and materials, and ④the space used to keep models and products.
5. There were various class times and school days. Folk school was managed in a number of ways, for example, by using traveling teachers. Also, Sloyd schools had diverse management methods.
6. For some cases craftsman taught Sloyd teaching and folk school teachers taught it as well, however most of Sloyd was taught by craftsman themselves.
7. The products pupils made were sold in auctions, exhibitions, or privately, and some of the money from the sales was paid to pupils as compensation.

* Associate Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University.